

ジャン・パウルの『フィヒテ哲学の鍵』 翻訳

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授 : ドイツ文学

<http://hdl.handle.net/2324/17970>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-37, 2010-08-28
バージョン :
権利関係 :



フィヒテ哲学あるいはライプゲーバー主義の鍵（1800年）

ジャン・パウル著 恒吉法海訳

目次

序-----	2
編集者に対する保護状 -----	6
鍵 -----	15
訳注 -----	32
あとがき -----	37

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 4

2010年8月31日

フィヒテ哲学あるいはライブゲーバー主義の鍵⁽¹⁾

序言

この『鍵』は元来『喜劇的付録』の最後の部分である。しかしこれは古い蝸牛の一種 *Nai de*⁽¹⁾ から分離して、かくて切断されて一層自由に動くことになる。肥満した『巨人』はこれには付いていけないのである。自らの子供に月桂冠を授けることが適切であるならば、五の冠をこの子供のために編むことだろう。しかしこれらの冠の名を挙げることはできる。

最初の最大の月桂冠は、この子供がどこでもそう見なすにふさわしいということである。特に正しいのは、この子供が、フィヒテの観念論のまさに基盤となるべき他者の共自我の必然的存在によってこの観念論を倒そうと試みている点である。しかし利己主義へと蒸留するに違いない観念論でさえ相変わらず感覚世界と同様に倫理世界とも妥協し得るものである。 — 哲学と森のニンフ[エコー]には誰も最後の言葉を有しない。 — しかしその月桂冠に関して私が大いに話しているこの子供は、フィヒテの根本精神、つまり絶対的行為あるいはアルビヌスの作用元素⁽²⁾ に対して、単に実践理性を用いるばかりでなく、もっと理論理性を用いて迫るべきであったろう。フィヒテ哲学そのものがこれまで頭の中よりは先に耳に届いていたので、これらのことが、私の未成熟の子供が述べたすべてのこと同様に、ヤコービ⁽³⁾を除いてすでに何人かの成人した戴冠の頭脳によって述べられてこなかったのは不思議なことではない。知識の世界では — 物体の世界とは違って — 物音の方がいつも明かりよりも先に届くのである。フィヒテ哲学を一度もっと明瞭に雲を除いて呈示すべきであろう[*1]、さすればこのモンブランの赤裸の氷は次第に、自分のよりも温かな光線の下、和らいで低くなることだろう、そしてはや天を支えることはないだろう。

申し上げたように、この子供がもっと主張できたであろうと思われるものは次のことである。つまりフィヒテの所謂理想主義的観念論ははなはだ絶対の中に住んで、織っているので、それで — 彼の実在する宇宙の中心では実存が、ちょうど或る世界の重力の中心では重さがそうであるように、規定の欠如で相殺されており — かくて今や有限性と実存の中へ通ずる道は（反対にこの有限性から絶対への道も同様で）、測りがたい教条的な飛躍や飛行、超概念なしには通じなくなっており、これらの超概念こそはまさに説明されるべきであったものであり、ここで説明を欲するものである。 — 単に個体化の面からのみスピノザ主義に侵入することができるとヤコービ⁽⁵⁾は言っている。このことは『知識学』についても、またどの哲学についても、それが純粹で絶対である限り、妥当する。 — しかしこうなることは無限の霊の哲学以外の哲学ではありえない。我々のどんなに明るい角燈も常に現在の角材で影を投げかけるからである。あるいは絶対的自我、経験的自我、非自我により対応した比喻で言えば、和音の説明の助けとなる三和音のいずれもが、すでに一つの和音をその内部に有しているからである。しかしある教義体系、空中楼阁の要石かあるいは土台は現実的なものであるというまさにその欠点が我々の感覚に訴えるものとなっている。相方手品[*2]で哲学は最も上手に我々をだます。

意識の説明のために強引に入手した自我の客・主観性はある比較の第三項によって、ある絶対的自由、自我性によって確立され、措定されるが、しかし人はこの自由、自我性に

思考の基盤として思考性を、偶有性、実体、諸力の基盤としてこれらの一切を、実存の基盤として実存を（実存は絶対の行動に対しては時間が永遠に対するようなもの、存在が遍在に対するようなものであるが）一般的に否認するものである。いや私はこの絶対の自我性に — （ここではもはや思考できることに達しないので、つまり我々は夙に範疇の範疇、至高の種類、実在を後にしているの）、この自我性がその基盤の基盤である限り、この自我性に対してこの基盤をも否認するであろう。かくて結局何も残らないというより — 何も残らないのでは、無はすでに一切を閉め出している以上、贅沢で、すでに確定的なことになってしまうであろう — むしろ無よりも無限に少なく、一切よりも無限に多い、つまり基盤欠如の基盤欠如である。（人は勿論ここからもっと先にもっと深く行けよう。思考できない世界は思考できる世界よりも思いがけなく大きいからである）。従って絶対的自我は（この定かでない不決定の自我、客・主観のこの論理的後輩、絶対的母親）、申し上げるがこの自我、人間精神の最も熱い永遠の問いかけに対するこの完成された答えは全く大胆に固定された問いかけそのものであり、あるいはすべての懐疑家によって要請された、即ち前提された匿名の X であり、すべての「隠された性質」の最後の、しかし超越的な「隠された性質」である。基盤のこの要求と共に残部あるいは有限性は容易に説明され、根拠付けられ、いわば喉の渇きから必要とするだけの飲み物が用意される。

フィヒテ的神が — 絶対の、エリュシクトーン⁽⁷⁾ そのもののように自らを食らい、キリストそのもののように復活する自我が、意識の、この我々を自覚しているが、しかし自らを自覚していない意識が — 実用的あるいは倫理的に考察されるとき、哲学に不可欠の行動の統一性が残るためには、自由は、我々の自由となるのではなく、我々の自由の基盤となる。自由のこの自由が必然的なもの（非自我）を措定し創造したのであって、それは単に抵抗を得るためであって、抵抗なしには自由にとって二番目の措定は不可能となる。信じがたいほど捉えがたいのは実存に対する無実存の絶対の者のこの戦いである、両者の間には何の関係も考えられないからである。更に曖昧なのはこの戦いあるいは行動の意図や性質を挙げるときで、これは単に自由に行動するための、自由な行動に他ならない。聖人の場合のみならず、悪漢の場合もそうで、ただ悪漢は正しいやり方で（ここには何か不可欠なものが欠けているが、しかし何か余所のものを持ち込むわけにいかない）自由のために自由に行動しない。最も曖昧な命題は目的概念で、この絶対の行動と共に自由は — ちなみにこの自由はもっと自由になることはなくて、それ故この教義によれば、新帰依者より千年続く聖人ほど固く信頼できる者はないのであり — 必然性あるいは現実の中でこれに対して勝利することで自らを実現しようとする。しかしこの勝利はすべての永遠の中へまだ何か打ち勝てないものを残さなければならない、抵抗が完全に止めば実存と意識とすべての有徳、悪徳の最後の審判の日が始まって、宇宙が瓦解しかねないからである。すると何ももはや存在しなくなろう。実存しない絶対性を除いて。

フィヒテ主義者のライブゲーバーは、彼はまさに以下の『鍵』の著者であるが、私宛にそのことについて記している。『知識学』は無限についての哲学的計算です。一度有限で説明可能な大きさの範囲から無限で説明不可能の大きさの範囲へ抜け出しさえすれば、全く新しく広大な世界に通暁することになって、この世界では単なる言葉のお蔭で — というのは概念も観照もこれには届かず、このエーテルの中で持ちこたえることはできないからで — ファウストの外套に乗っている具合に容易にあちこち移れるのです。かく

て説明不可能なものはいわば箒のようなものとなって、魔女は民衆の信仰によれば箒の上を越えられないけれども、しかし箒に乗って地上の上、大気中を行けるのです」。

私が私の子供のために編み込む第二の月桂冠は、もっともそれを子供に被せることは許されないけれども、最新の哲学的教団創始者の前で丁重に敬意を払って帽子を脱ぐすべを私から学んでいるということである。この創始者は、モペルテュイ⁽⁸⁾が地球に対して提案したように、精霊の球の中心部まで穴を掘ったのである。私とか私の子供とは違う論争者達はこれに対して、人物よりは体系を思いやって、理詰めにはローマ人達の戦術を採用して、象の代わりに象の上の象使いをむしろ攻撃するものである。

それ故観念主義の教団に対して、私と私の子供をも丁重に取り扱うように頼み、そしてこの教団が父と息子を砕き、焼灼し、鉋滓にし、ガラス化し、揮発化するときでさえ、常にこの教団を特徴付けるあの礼節をもって行うように頼むとき、余りに不当な要求と言えるだろうか。 — 誓って、『クセーニエン⁽⁹⁾』以来我々はほとんど皆秘かに、どうしてかは分からないが — というのはもっと早く伝染するものはないからで — 粗野な話し方をすれば、全く粗野になってしまっているのである。この見解ですら、この見解の否認ではない。こうしたベルギー風不作法は、敵対者が私に対して単に称賛でもって行えば、つまり皮肉な称賛でもって行えば、辛辣さという欠点なしに回避されるのではなからうか。私は、敵をしばしば同じように遇しているのだから、そう要求していいのではないだろうか。その為に私は発言羞恥擬態法を取ったのであれ、不快事軽減法、あるいは物真似法、それどころか軽蔑誇張法を取ったのであれ。

第三の父親の月桂冠からは哀れな雛にまさに麦藁冠⁽¹⁰⁾が生ずることであろう。つまりライブゲーバーの冗談と真面目の共同購入に対する月桂冠からのものである。私はどの書評家も自ら凝乳酵素を持参して、かくて混交物をまた両要素に純然と分けて欲しいと願うし、書評家は冗談を理解し、かくて真面目を理解して欲しいと願うものである。

第四の冠は、子供が多くのことを名付ける際の率直さに対してまとめることにした。例えばこの子供はしばしば観念主義を観念主義と呼んでいる。上述の教団の最良の頭脳でさえ大聴衆に対して、古い観念を新しい観念と称する彼らの先祖の苦し紛れの自由の代わりに、より豊かな自由を取り出して、新しい観念を古い観念と告知して、別種の古い観念を観念主義的言葉で流布させている。私はいつかほんの一時間当世の体系に無知な大聴衆となって、現実主義的人間分別の全く粗野な食料の形式、色彩をとって流通している観念主義的砂糖菓子が一体どんな味がするものかせめて知りたいと願わないでもない。そうなら半ば私は、この新プラトン主義的、原初キリスト教的、日本的イエズス会士的順応⁽¹¹⁾に接して、この件を全く誤解し、私の現実主義的感覚のために、著者達が望むよりも別様に理解するか、あるいは半ば私は言いようもなく混乱して、暗闇の中で読むような仕儀となって、それでも更に苦しみ続けることだろう、著者が — 半ば姿を暗く消して、半ば飛び上がって、かくして敵から逃げるイカのようなもので — 自らの倫理的炎で私の炎を要求するであろうからである。 — — いや半時間も、私は座っていて、うんざりと、何のためかと注目しながら、燃え上がっている聴衆でありたいとは願わない[*3]。

しかし私が私の立派な雛、皇子のために摘み、巻いた五番目の月桂冠、 — かつてはポーランドの国王が五つの王冠を所有していて、そのうちの五番目の王冠は王妃の王冠であったように、五番目の最も美しい王冠、これをここ世間の前で本当に皇子の頭上、こめ

かみの上に被せたいと思う。そしてこの新たな王冠を戴いたものを大兄に捧げ、献呈したいと思う、

親愛なるフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービよ。

これは大兄に呈上されるべきであろう。すでに長いこと私の心が大兄の心に捧げられているように。我々のやりとりした手紙は、御存じのように、我々の印刷したものの後裔にすぎない。いや私は大兄を以前から、もっと昔から敬愛してきた、ハインリヒよ、それにもっと根底的に敬愛してきた。というのは大兄の手から私は美しく鍛えられた武器を受け取って、その武器で生命に向けられる時代の解剖のメスをはじき飛ばしてきたのだから。詩人がポリュフェモ⁽¹³⁾スのように胸の上に一つの目を持ち、哲学者がマホメットの天国の浄福者達のように頭のとっぺんに一つの目を持って青空を覗いている、ちょうど詩人が深みを覗いているように覗いているのであれば、まっとうな人間は二つの目を額と胸の間に有して、あらゆる所を覗いているのである。―― それ故に私は相変わらず大兄を愛し続けている。しかしなぜまだ大兄にお会いしていないのであろう、我がハインリヒよ。

一

ヴァイマル、一八〇〇年三月七日

ジャン・パウル F. リヒター

*1 シャート⁽⁴⁾はこの点について自らの寄与をなすつもりである。彼は十分に明瞭で、どのフィヒテの初心者にも推挙されるべきである。ただ彼は許された哲学的反復を余りにしばしば繰り返し、証明としており、余りに秩序がない。―― 秩序というのは―― すでに経営者が言っているように、半ば糧である。我々哲学者にとっては秩序は常に―― 完全なる糧である。

*2 手品師は別の男を必要とする芸をこう呼んでいる。

*3 この多くのことがフィヒテの『人間の使⁽¹²⁾命』に妥当する。これは一昨日私とともにJ [イエナ]から戻ってきたものである。『知識学』の知識なしには第一章は理解できない。最も人気のありそうな第三章はそれどころか誤解される。普通の読者は二〇八頁とか三三〇頁等では現実主義を見いだし、二九六頁等では観念主義を見いだすが、しかしまた次の総合文ではその逆を見いだす。二九二頁等に至っては絶対的自我と倫理的世界秩序の描写を見いだす。―― いやこの通俗性、脱具体化したもののこの曖昧な具体化は哲学的読者にとってさえ煩わしいものであり、この読者は一方の手では常に身にまとい、他方の手では脱がなければならず、新しいものから常に何か古いものを作らなければならない。

編集者に対する保護状

私はここで自ら保護状を仕上げなければならない。自分が以下の、『知識学』に好意的な『ライブゲーバー哲学の鍵』の出版によって同様にまたフィヒテ主義者の一員に加えられるかのような誤解を友人達の間で招かないためである。それ故私は『鍵』に著者の私信と哲学についての若干の演習をこっそりと、その大系の最初の衝撃を和らげるための砕氷柱として前もって送ることにする。それでも私を知識学徒の一員としたいのであれば、そうすればいい。しかし私の味方とはいえない。

私の善良なる、どのドイツ人にも私の『花の絵』⁽¹⁾から知られているライブゲーバーが『知識学』に参入したのはその特異な性質の全く自然な発展の然らしめるところである。フィヒテ主義のシュレーゲル兄弟はそれ故『アテネウム』⁽²⁾で彼の思考様式や文体を高く評価し、一方私の作品中のその他の思考様式や文体、例えば私の文体は評価していない。多分ライブゲーバーはすでに当時墮落していて、私の背教者であったのであろう、そして両兄弟はひょっとして彼と面識があったのかもしれない。ブリッツミュールからのこのねぐらはどこにあるか私は知らないが、古い手紙によると彼は最初腰を据えて、フィヒテを研究したが、しかし単に自分の流儀でそれをからかうためであったそうである。しかし私の見るところ、結果として、ロッテルダムの市民ブレードンブルク[*1]のようなことになってしまった。この男は、スピノザを徹底的に論駁するためにスピノザを示威的な戦闘隊形に置いたのであるが、しかし準備の間にいつのまにかこのユダヤ人に捉えられて、圧倒されてしまったのであった。『知識学』をからかおうとする最初の意図の痕跡は『鍵』のいたるところにまだほの白く輝いている。そしてその中で自分にとって難しい、真面目な、冷静な文体に戻って始めようと試みても、その度にまた（自分の冗談家のグロテスクな性情故に）万事を滑稽な光に当てて、かくて単純な読者を煙に巻いている。ここに彼の手紙がある。それに続いて私の演習が掲載される。

ハンブルクにて

ドレック墨壁四十六番地ザムゾン・ヘルツ⁽³⁾様方宛に、このお宅から私は二個のボンズ用グラスを奪い取ったのであるが、親愛なる伝記作者よ、貴方の私宛の返事はこのアドレスの下に正称号留保 S 殿⁽⁴⁾として出されたい。私はちょうど酷い目にあった、やせ細ったスイスから来たところだ。今やスイスにはベルンハルト犬そのものを送らなければならない。というのはフランスの保護者[犬]、救助者[犬][*2]がその犬の骨まで引きむしってしまったのだから。自由の五人執政葬列[*3]と共に、二、三の街路を通り過ぎたら、最後は万事が呪われることになる。世紀全体は小子どもとの大いなる目標への競争だ。しかし真理と自由へのこの一般的な競争は私が何度かグリニッジで見た同様の競争に達しているかもしれない、ここでは水兵達が櫛やパイプの火皿、懐中ナイフ等を賭けて、二匹のしらみをテーブルに置き、手に汗握るのだ、どのしらみが敵のしらみか自分のしらみか、真っ先にテーブルの端に達することになるか、と。

私も数週間前から競争に参加している。そしてベルンで（襲いかかってきたフランスの雪崩の下で嘆きや挫傷を単にそれ以上ながく見つめていたくないので）深く哲学をして、熱中して同封の『鍵』を作成した。

シャートとかいう教授は、私の耳にしているところでは、私の『知識学』の金の延べ棒

を民衆のために貨幣に鑄造するそうである。それは忝ないと伝えて欲しい。私やフィヒテ、シュレーゲル兄弟、シェリング、ヒュルゼン⁽⁵⁾、シャート、学生達は批判的フィヒテ的インク壺を — ルターがそのインク壺を悪魔に対してしたように — 何度壁に投げつけても十分とは言えないだろう、まだ付いているルターの染み同様にその窓ガラスの染みはかき消されるべきではないというのであれば。我々はまだ三万人の聴講者すら得ていない。しかしオックスフォードでまさにこれ程の数を得ていた偉大なヨハネス・ドゥンス[スコトウス]はその哲学と共に泉下⁽⁶⁾にあり、灰となっている。しかし私は、我がフィヒテの知識学が夜警人達によって口述され(彼らに歌うよう薦められた歴史的時代の代わりに) — 普通の男に暦の中で — まだスペインでは見られる復活祭の日曜日での冗談の説教の中で — 食堂での食事の説教の中で — 良くできた喜劇の中で[*4]、それどころか棒で巧みに必要な文字を指示するかもしれないケンペレ⁽⁷⁾の木製のチェス・トルコ人によって説かれる時代を更に体験することになると思っている。 — 一日中生きてまま自らを解剖し、 — 犬の洞穴⁽⁸⁾の中で実験のために特別な犬を飼うように — 同時に洞穴でありかつ自ら犬である、つまり自らが一時間ごとに観念主義の死の空気の中で窒息させ、現実主義の普通の生命の 대기の中で目覚めさせる犬である哲学者にとって、一つのか弱い、しかし十分の報酬であろう。

理性それ自体は夢を見ている人のように、たとえどのように苦しみ、自らをつねり、夢想について夢想しようとも、自分からは抜け出せない。理性は気管のように内部に異物を甘受できない、 대기(言葉、精神)は別である。従って、粉碎するカントの後では、カントはまだ大きな部分、物自体といったものを残したのであるが、否定するライブゲーバーが立ち上がらざるを得ず、(というのは私がフィヒテを倫理的に仮定するのは『鍵』で明らかになるだろう)、ライブゲーバーは物自体も石灰化し、白い無しか残さなかったのである、(化学者が耐火性の錫石灰を名付けているように白の無である)、つまり無限性の観念的有限性である。しかしこれをも取り除いてしまえば、(フィヒテはそのことをほめかしている[*5])、単に黒い無しか残らないであろう、即ち無限性である。そして理性はもはや何も説明する必要はないだろう、理性そのものがもはや存在すらしないであろうから。 — これがまず — 思うに、すべての学派や我々皆がとても求めている真の哲学的諦観主義⁽¹⁰⁾となることだろう。

ここで伝記作者殿、私の『鍵』の端緒、髭を手にして、世間にこの鍵を渡されるとよろしい。この中で私は私のライブゲーバー主義の証明というよりは結果を、ガーブラー社、ライブツィヒ、一七九四年の私の『すべての知識学の原理』、それに同社刊の一七九五年のより難解な『知識学の特性の基本』に通暁していない読者方に — ひょっとしたら女性の大方は私のことを理解していないと仮定できるかもしれないが、 — カント派がよくやるように辞書⁽¹¹⁾という易しい変化のある形式で[*6]差し出し、解明することにいたそう。

ただ、暗示的にはあるが、一つの重要な証明を行うことにする。つまりその結果をより首尾一貫させて、結局は所謂人間の分別にとって本当の真の狂気であると定めることによって、本当の生来の哲学者達に対して、分別がかくも確固としたドーム状の教義体系を精神病院へと歪めるとき、哲学者達が永遠に惑わし抓むかくも残念ながら一般的な人間の分別はどのようなものになってしまうかお見せいたそう。分別はかくて彼らの目や私の目

には全く体系の一つの否定的試金石と成り下がって、それで、分別が狂っていると見なさないものは、純粋に哲学的なものと言えなくなってしまう。 — もっともその逆は真ではなく、理性的なものでないままに、一つの考えがとても馬鹿げたものになりうる。 —

それ故、我々は喜んでキケロの称賛を受け入れる。つまり哲学者が論争すらしなかったものは何も馬鹿げていない、と。ただ、これは単に哲学的完成の我々の時代にのみ言えることであると、哲学者は認めなければならない。同様にヴェンデボル⁽¹²⁾ンも言っている、イギリスでは最も多くの理性と最も多くの精神病院が存在する、と。かくて鷹が鷹狩りに使われるのは、鷹が不眠によって強制された狂った状態にある間のみであるのである。

それで結構。私の『鍵』がねじって止めるのではなく、時計のねじを巻くのであれば、その鍵を生涯、侍従の鍵、解決の鍵、合い鍵等々として有したい。

伝記作者殿、さようなら。貴方が今や反フィヒテの雷雲の中へ上昇させる私のフィヒテ的紙凧は、貴方が紐と一緒に下に立っているのです、貴方の頭のとっぺんに二、三の雷をもたらすことだろう。紐をしまうことだ。 — ところで。貴方はびっこで、鼻を横向きにかんだ頑丈な男のことを覚えておられるか。この男は貴方をヴァイマルに訪ねて、入って来たと言ったものだ。いつも間違った風に銅版⁽¹³⁾画に描かれているお方と知り合いになりたいと願っていたと。思い出して欲しい。ちょうど貴族達は貴方の街角の家の方を長い櫓の跡を描いて滑りすぎるところで、貴方は寒さのせいで眼鏡を付けて窓ガラス越しに覗いておられた。一人のびっこが、貴方の、世紀同様にほとんど六オクターブの長さの、しかし惨めなピアノをがんがん弾いて、かくて瞥えをなしたことを覚えておいでか。彼はこう言わなかったか、自分は直接イエナから来た、古いイエナの七つの奇蹟⁽¹⁴⁾、つまり狐の塔やヴァイゲルの家等々ばかりでなく、新たな同様に偉大な奇蹟をも見てきた、と。そこで貴方はその後、話を貴方の作品の登場人物にもって行き、その中でまさにライブゲーパーの性格を称賛して持ち上げ、謙虚にこのびっこの男にこう誓わなかっただろうか。(勿論貴方は画家としての貴方に特別な照明が当てられることを期待しておられたのであろうが)、自分の前にライブゲーパーが現れたら、きっと畏怖の念を抱いて、この立派な自由な大胆な人物の前でかがみ込むことだろう、と。 —

私とそのびっこだったのだ。

ライブゲーパー」。

*

こうしたこと一切に私は記憶が全くない。それにここでは必要ない。かくて私は早速執筆することにする。

そもそも哲学することについての演習

ライブゲーパーが自分の説は狂気であるとのより厳密な証明で自分の説を擁護し、我々を誘うという期待を明らかにしている彼の手紙の箇所まさに触発されて、私は編集の決意を抱いている。というのはまさにこの証明が我々を彼の体系から追い払うからである。二重の明証が、つまり感覚の明証と理性の明証が我々の中で裁き、照らし出すようになると、 — そして全く合いの子のような具合にしなければならない、つまり両性の平衡状態の中で法に従ってその一方を否認しなければならないとなると、私はここで何も生み出さないより弱い方の性を否認することにする。

しかし誓って。それは必要ですらない。どこかの男が、形而上学的微分や積分は、それをポーランド語とかドイツ語、あるいは何らかの言語で書かなければならないが故に、ただそれだけで不都合、空虚なものであるという薄いがしかし立派な本を書きさえしたら、我々哲学者は皆海から安全な陸地に上がり、陸地を目にすることになる。

私はこう思うからである。

我々の言語は根源的には単に外部の諸知覚のスケッチ画家である。後々の内部の諸知覚はその画家からより先のスケッチのスケッチを感受するだけである。それ故に量が — 感覚世界のこの唯一の観相学的断片⁽¹⁵⁾が — ほとんどすべての語彙を形成する。質の方は — 別の言葉では現象の諸力やモノイドに当たるが、我々には単に意識の中で与えられ、概念の中では与えられない。 — これらの魂は常に単なる量のかの肉体、つまり衣装の衣装に隠されることになる。言語が例えば視覚世界よりももっと聴覚世界から借用されておりさえすれば、我々は全く別様の哲学を有し、多分、原子論的な哲学よりももっと動的な哲学を有することだろう。結局どの像やスケッチも同時にこの像やスケッチとは別のものでなければならない。つまり人々がまた写し、描く等々のことができる原像や事物そのものでなければならない。さて哲学者が計算皮[書かれたものを消して使える皮、羊皮紙]を広げて、そこで超越的な連鎖計算をしようとしたら、単なる言語は、計算をしくじる三つの確かな道を指し示すことだろう。

最も古い誤用の方法は、質を量として、諸力のこれらの肉体や基礎を総計し、微分しようとするのである、原子論者や百科全書派がしたような按配である。計算者は心理学の数学への変身を通じて — ハラ⁽¹⁶⁾ — の生理学の解剖学への変身同様に — 数学的合計を強引に得ようとする。これは詩を読み通す代わりに詩を計量し測定したら生ずるような美学的合計に似ている。例えば唯一の視覚的メタファ、想像、予示、観照、観念、像は精神的活動の周りに原子論的な霧や靄を引きつけているが、聴覚的メタファであれば霧散していたであろうものである。

計算を間違える第二の道は、計算者が量を質へ、肉体を精神へ蒸留し、上昇させようと試みる道である。しかしこれには到達できないし、近似に至ることすらできないので[*7]、そして哲学的力学は、数学的力学のように、量を — 例えば力が通り抜けた空間を相手に — 累乗指数[代表者]に利用できないので、計算者は最初の間違った道に戻るか、あるいは吐き出された空ろな量を取り出して、更に計算したり、結論付けたり、結び付けたりし、また質を取り出して設定したりする。これは古い常用のカップに見られるような真の絵文字で、半ば文字で半ば絵であり、無機物からの生誕という手品師的模倣で、半ば原子論的、半ば力学的である。

それに近い第三の、しかし最良の作品は、現実の黄金を薄く、広く叩いて、それを透明にすることである。言葉では、数学のように、スケッチ[記号]と客体の同一性は生じないので、というのは言葉は客体の影絵ですらないし、五つの点⁽¹⁷⁾ですらないので — この五つの点は事柄の若干を伝えはするのだから、 — そうではなく、恣意的な、何も描かない、思念のハンカチの結び目にすぎないので、かくて言葉は、卵をいつも、孵化するよりも早く[中身]を吹き出してしまう哲学者にとってまさに不可欠の道具となる。(哲学者の内部と外部の) 現実の諸世界、哲学者が説明しがたい一つの世界に溶解して説明する諸世界は、表象[*8]の中では単に先の球のサークルとしてしか輪郭を描けない。そしてこれ

らのサークルあるいは表象が言葉の中ではまた点とか中心となる。原子のこの点占い、この論理的代数学が今や哲学の謂である。即ち現実の光線によって表象は立派な影絵を描く

— それから表象はそれぞれの特異な差異によって空白にされ、かくて表象は幾つかの客体を受け入れ、味覚はより繊細な匂い⁽¹⁸⁾とかあるいはその逆と定義されるようになる

— それからそれが続いて行き、概念から概念が作られ、仕舞には宇宙全体が今やそのすべての諸力や色彩と共に透明に広大な軽い非自我として存在するようになる

— するともう一步進むと、この非自我すら自我とは単に段階的に、「光から暗闇が」[*9]異なるようなものにすぎず、観照されたものは、観照となり、観照は観照しつつあるもの、あるいは自我となる

— すると広大なカルタゴ⁽¹⁹⁾、神の無限の町が自我の皮膚から裁断されることになる。

我々は年中盛りだくさんの言葉で思い出し、空想を描いているので、空虚な言葉で考えていても、すぐには気付かない。例えばダーウィ⁽²⁰⁾ンが主張しているように、長いこと一杯に詰まったパイプを口にくわえている者は、暗闇の中ではそれを吸い尽くしたことにすぐには気付かないようなものである。

今や誰もが哲学に対する防衛のために哲学を用意しなければならない。現存する[にらみ殺す]バジリスクの鷹狩りに対して鏡像のバジリスクを用意しなければならない。しかしヤコービの哲学のような正しい哲学は棄えていて、こう告白する。つまり理性は飲み水を浄化するが汲み出す[創造する]ことはできないダナイデスの濾過であって、理性は単に、ヘルダー⁽²¹⁾が言っているように、聞き取り、即ち、得て、見いだすけれども、発明はしない、と。しかし人間にとって説明や名付けは思慮や知覚よりも達者であって、知覚は、予感、つまり天才的な知覚よりも容易である。頭も心も

— 片方だけでは解明できない真理、両者が一緒でないと解明できない真理というものがある（そしてこれらがより重要である）。極地では寒さのために、赤道では暑さのために盲目である。

哲学者自身単なる三段論法の推理をいかに信用していないか、しばしばそれは他人や自己の権威を当てにしているという奇妙な観察を経験すれば明らかである。私の言うことはすぐに理解されよう。数学者は、いかに九九の表は確かであっても長い計算を他人に繰り返させて、自分の計算の正しさをより確かなものとする。あるいは数学者自らが繰り返す。十本の指以上数えることのない野蛮人は九九の計算の際にはきっと反復という抵当権を握らざるを得ないだろう。

— 更にフィヒテはその『知識学』の序言で言っている、自分が間違っている可能性はある、それ故他人の吟味にそれを委ねる、と。即ち論理的九九の正しさはその応用の正しさを保証してはいないのである。弱いしかし分別のある頭脳は九九の応用に対して、フィヒテの応用に置くよりも、つまりフィヒテが自分の応用に対して抱いているよりも大きな信頼を置いてはならない。

— 同様に更に哲学者や数学者は偉大な化学者や歴史学者等々に信頼を抱いている。そして

— これは真理の歴史性ということが違いを形成しているのではない証拠に

— 化学者や歴史学者は同様に哲学者や数学者に信頼を抱いている。

— 最後に確かに天才的に明敏な者は自分の連結推理で全世界からの否認を無視することができよう。しかしこの信頼は

— 自分の論理的規則に基づいているのではなく、というのはこの規則は世界と共に共有しているのだから、そうではなく

— この規則の応用への信頼は単に、自分がより偉大な諸力に恵まれていること、即ち立派な頭脳であるという事実からの結論に基づいているにすぎない。彼はつまり

自らの權威なのである。

こうしたことすべてから何が生ずるか。第一に、論理の明証はまずその（対象に対する）応用についての別の明証を必要としていることであり — 第二に、我々は感覺的明証、倫理的明証の場合には權威を必要とせず、それどころか克服してしまうのに、論理的明証はこの両明証を借用できても、両明証の助けにはならないということであり — 第三に、一人よりも多くの方がむしろ論理的計算を満たすであろうという[*10]蓋然性の計算や希望は、（さもないと多数それ自体は単に錯誤の反復を前提とするであろうので）、あるいはより大きな知性は同じ規則の場合、知性をより確実に応用することになるという希望は、つまりこうした蓋然性の計算は、申し上げると、人間性の中に無意識に、我らの大気圏や我らの頭脳の雲の背後にあるより高度の真実性に対する生来の信仰を前提とするもので、この真実性は我々にとってすべてのその[人間性の]善なるもの、喜ばしいもの同様に、永遠に規則の中で明らかになるもので、例外の中で明らかになるものではない。

話を戻す。魂が卑俗で困窮したものになるほど、あるいは若いものになるほど、魂は喜んで軽やかに体系に引きずり込まれる。体系の中の一般的明かりにびっくりして惹かれるのだが、単にまずスケッチで事物を、まず鍵で謎を知ることになるからで、その逆であるからではない。空虚な荒れた頭脳の中では理性は真っ直ぐな道をより容易に進みやすいが、腐肉の中では単に空の動脈だけが真っ直ぐに伸びているようなものである。これに対して豊かな頭脳が別の豊かな頭脳の衛星であるとか幻日であるということは決してなかった。

— この頭脳は自らの暗い諸世界に対して十分照明を与える必要があった。 — しかし中心の太陽の周りで同心円を描くその旅の道連れは容易である。

体系は長く続くと — 私はまさにカントの体系を考えているが、 — それだけ一層軽快に、動きやすく、機械的に、捉えやすくなり、従ってその奴隷や受祿僧や聖職祿受領者は一層惨めなことになる。極めて深淵な体系が年々何の深みもないままに、操作され、唱えられる。その最初の弟子達や使徒達は常に機鋒に満ちているのであるが。 — 結局ある体系の組合にとって — 私はまた批判哲学を名付けていいだろうが — つまりこの二千の語彙の支配者達、インドの太守達[*11]にとって、他の言語はすべて（リングワ・フランカ^(2.2)として）全く理解しがたく、それでどの見解にも不案内となってしまふ。それ故その中の瞑想者達や斜視者達[*12]は、カント主義的作品（カントの作品ではない）のように明瞭でない作品の詩的な晦渋さに不平をこぼすようになる。実際そこひの患者はそこひの針を見ることができない、眼科医を見ることができないようにできないと嘆いていい。他方ではしかしながら、彼らは自分達に自然が猫に対して[*13]そうするようになお第三の瞼を与えたことに感謝して気付くべきであろう、これは彼らが林檎[眼球]を夜間用にとっておくように、日中の明かりに対して遮断させるものである。 —

この短い保護状は、私の友人達にとっては、あたかも私がこの『鍵』の出版で、私のような類の哲学者に許されるよりももっとフィヒテ主義に好意的であるかのような嫌疑を免れるに十分な長さであろうと希望する。それにもかかわらず我がライブゲーバーが、とにかく彼はフィヒテ主義者なので、最も完全に最も自由にそのフィヒテ主義者であることは楽しいことである。能力と意欲のある人は、そのことが納得できよう、『鍵』をフィヒテからの引用と付き比べてみるといい、あるいはもっと手短かにヤコービのスピノザ主義の描写と比べてみるといい。 — これによると現実の实在[ens rea^(2.3)le *14]を少しだけ移動

させると『知識学』の部分が展開されるのであるが、実践理性はこの部分へはまだ参入していないし、参入させられていないのである。 — あるいはもっと容易にネープの自我哲学の概要[*15]と比べてみるといい。 — しかしライブゲイバーや多くの超越的ほら吹きのエエナ人といった男達が『知識学』に入れあげているのであれば、一体何時か気付くべき時である。

何という解きがかたい熱狂的な言語の混乱と思考の混乱を招いているかまことに予感するべき時になっている。フィヒテのより高度な — 芸術作品として不滅で天才的な — 観念論がそのポリープの腕をすべての学問の方へ広げて、中に引き入れ、それでメッキを施している。 — 自我とはただ段階的に異なる非自我に有機体によって生命を吹き込む一方のフィヒテ主義者達の物理と化学における物活論^(2,4)、それに対して別のフィヒテ主義者達は精神を物理的ガルヴァーニ的現象や比喩に具体化させており — 芸術や空想の崇拜、それは芸術や空想の像はすべてのそれらの原像同様に真実であるからというわけであり — 詩的な、真面目さを有しない遊戯と、形式による素材の殺害（活性化の代わり）

— ヤコブ・ベーム的な比喩哲学[*16]、ここではゴシック教会の中でのように窓ガラスを重ねて塗って崇高な暗さが生ずることになっており — すべての妄想、特にすべての先の世の迷信的妄想に対する哲学的というより詩的な寛容、いや妄想に対する、そしてしばしば真理に対する真面目な信仰を避けるための、真実に対する詩的戯れの信仰 — 詩人が神話的宗教に対して抱くような、また画家がカトリック的宗教に対して抱くような、すべての宗教に対する画家的観点[*17] — 素材のない形式的倫理、これは何人かのちょっと前の天文学者の太陽に似ていて、この太陽は単にその光線で、つまり交互の引力によるのではなく、諸惑星を周りに差配しており — そして倫理的利己主義、これは高貴なフィヒテが推察するよりももっと超越的な利己主義と親族関係にある。というのは倫理的利己主義も超越的利己主義も一までしか、せいぜい二進法^(2,7)までしか数えないもので、つまり自我か非自我かあるいは悪魔にまでしか至らない。 — — — こうしたすべての徴候が我々に告げているのは、多くの高い山々での雪が（というのは最新の観念主義の十二人の使徒は七十二人のカントの使徒^(2,8)ではなく、立派な頭脳であって、ちょうどそもそもこの体系は、少なくとも今世紀には、模造しがたいものであるようなものであるからである）、今や解けていて、森の水が流れ落ちて、広い、すべてを揺り動かすノアの洪水になっているというものではないか。

まことにこのような洪水に接して、この体系は何という途方もない補給とすべてを包み込む奔流の支流を化学や物理学、美学、倫理、形而上学、ブラウン主義^(2,9)、ガルヴァーニ主義^(3,0)、それに — 比喩の見通しがたい組み合わせによって獲得するに違いないか、少しばかり計算してみさえすれば[*18]、水成論者^(3,1)ならば、類似の洪水の運命によって慰めを得ることができよう、つまり洪水は仕舞には干上がって、新たに芽吹く世界しか残さないのである。

時代と、我々の中の永遠の自我、我々の上の永遠の汝に我々は希望を抱かなければならない。 — むしろ我々、無限の太陽から跳ね散った地上の破片はちょっと昔の天文学者の妄想を実現したらいいだろう。この天文学者は青い空をクリスタルのドームと見なし、太陽を、炎の天が燃えているのが見える移動する開口部と見なしていたように、我々にとって理性とか明るい自我は自ら創り出す、引力を持った太陽ではなく、単に地上の修道院

のドームの明るい裂け目、継ぎ目にすぎず、そこを通してはるかな広大な炎の天が穏やかな完成した円を描いて燃え出てくるものであればいい。

- *1 ベールの『辞書』。スピノザの項、注 (M)。
- *2 狩で知られている犬どもである。 — ベルンハルト[ベルナール、セントバーナード]犬はかの名前にもっとふさわしい。それらの犬は聖ベルンハルト山[峠]の善良なる僧侶によって遭難者達の慰安と指導のために派遣されるのである。編集者の注。
- *3 ニュルンベルクの八人衆、三人衆の葬列が知られている。編集者の注。
- *4 コメニウス⁽⁶⁾は哲学の歴史を喜劇にまとめた(イエズス会士が文法をそうするように)。私見では哲学及び哲学者の歴史を明らかにする最良の方法である。編集者の注。
- *5 フィヒテは通俗的に言っている⁽⁹⁾(まさにそれ故理解しがたいが)、「一気に」我々の精神は宇宙を無に帰することができる。彼の体系の意味ではこういうことである。我々の絶対的無限の自我はその束縛、つまり非自我の(宇宙の)その措定を解消できる、従って客体と共に主体も、あるいは自覚的自我も、それ故すべての存在を解消できる。というのは絶対的自我自身存在しないからである、それは常に生成したり、行動したりはするけれども。編集者の注。
- *6 しかし私は『鍵』のアルファベットの秩序を体系的な秩序に変えて、記事の上にパラグラフを書いて、多くの者にとって理解しやすく、またよりの確になるようにした。編集者の注。
- *7 例えば絶対的自我の境界付け、制限というフィヒテの言葉を考えてみるといい。それはある量を表していて、最高度の抽象、剥製に従っていて、質に応用されるときにはただ次の言葉のような具合になる。狭隘、囲い込み、築堤、束縛、圧縮、濃縮等々。この生き生きした言葉で無限なものの有限なものへの関係を表そうとすると、私は何か間違ったことを考えていると気付く。先の言葉でそうすると、そのことには余り気付かない、その言葉では私自身余り考えないからである。ヴォルフ主義者や批判哲学の学派は空の貝殻の極めて豊かなキャビネットを所有している。 — かくて自分自身への活動のフィヒテ的回帰はある量的メタファであって、これは諸力へ応用されても、全く何も意味していないし、説明することは更に少ない。
- *8 「現実とは、現実の直接的な知覚以外には意識以外の意識同様にまた生命以外の生命、真実以外の真実同様に表現しがたい」。 ヤコービ著『信仰についてのヒューム』一四〇頁。
- *9 『全知識学の基礎』七八頁から八〇頁。
- *10 それも当然である。少数者は多数者に対して、両者が同じ思考力を有するとき、常に不当である。同じ場合一人の人間は世紀に対して不当である。しかし一人の人間がより大きな思考力を有するとき、この者は先取りされた世紀となり、将来の多数者となる。
- *11 インドの太守は自らを二千語の保有者と称した。そしてフランス人の領事に尋ねた。「そちらの国王は幾つの語を保有しているか」と。領事は「宮廷は跪いて欲しい」と頼みながら — 百科全書を渡した。ランベルク『ある紳士の日記』111頁。
- *12 瞑想者達や婆羅門は鼻の上を見る、斜視者達は鼻を通して見る。

*13 ニコライの『病理学』、第五卷。一九四節。[Ernst Anton Nikolai(1722-1802、イエナの医学教授)。

*14 『全知識学の基礎』参照。四七頁。

*15 彼の『理性に対する理性等々』参照、アンドレア書店、一七九七年、七二頁等。この明敏で深い頭脳は、力強く取り扱い、把握していて、心も豊かであり、敵、味方に推奨できる。まず敵つまり批判哲学派には、彼が批判哲学のある体系を書いて、ニートハンマーのジャーナル一七九五年第六分冊では『事物の存在を思弁的に証明することの不可能性』という論文を書いている点で推奨できる。一 第二に味方には、つまりメタ批判哲学派には、まさに上述の立派な本を書いたということで推奨できる。私はここで彼を推薦し
一 そうするために 一 付言するが、彼を私に推薦したのは友人のヤコービで、ヤコービはフィヒテ宛の書簡でこの哲学者のことに触れていたことであろうが、ヤコービはその後ゲルステンベルクを通じてようやく彼のことを知ったのであった。一 ネープの本それにヤコービの越えがたいスピノザ論の第七付録とヤコービのフィヒテ宛桂冠書簡によって[やくざなフィヒテの]自筆証書負債の哲学から抵当付負債の哲学へと進展しない人は、
一 その[やくざな]哲学を発案したのでなければ 一 長いことその哲学を読んでいる場合にのみ弁解の要があり、ただ聞いただけである場合には弁解しなくていい。

*16 例えばシュレーゲル兄弟の諸作品に見られる。彼らの部分的暗さは混入されたライプゲーバー主義からむしろ生じており、化学的形而上学的比喩的言語からとは余り言えない。この言語がむしろ彼らの敵に示しているのは、ギリシアの手本に対する彼らの鼻屑があるとしても、近代の手本の、つまりまさに上述の靴屋の認知と模倣をかなり含むものであるということである。そもそもまさに彼らに対して称賛しなければならない点は、彼ら自身に固有のものであって、翻訳の才能と、批評というそれに近い、もっと稀な才能であり、この批評は若干のギリシア的鼻屑にもかかわらず、大抵のアカデミックな批評よりも自由で包括的で、フランス的趣味の瑣末主義を越えている。これに対して非難すべき点は、彼らのシニカルな厳しさを除けば、大抵は他人からの借り物である、つまり彼らの哲学的美学的発見のことである。彼らがその発見物について一度易々と数え上げ、証明したら、多くの敵は恥じ入ることだろう 一 彼らの味方はそれどころか皆無であると言うだろう、
一 つまり自分達の発見物はほとんど自分達のせいではなく（例えば三つの世紀の傾向⁽²⁵⁾ というしばしば論争された命題） 一 単にカントやフィヒテやゲーテが夙に言ったことを繰り返したにすぎない、と。

*17 『宗教の教養ある軽蔑者のための宗教についての講話⁽²⁶⁾』という普通は立派な話のことを指している。彼は宗教という言葉に新しい、定かならぬ詩的な意味を与えているが、この意味には彼の関知しないところで古い神学的意味が根底にある。どの全体も、つまり宇宙も単にある精神を通じてある精神のための全体となるからである。

*18 私がハンス・パウル宛の手紙で示したように、こうしたすべての出会いからは何か一つの間違いしか証明されないだろう。[ハンス・パウル宛の手紙、拙訳『ジャン・パウル中短編集 I』(九州大学出版会) 442-450 頁参照]。

鍵

第一節

真理とは何か。この問を私は自分が受難劇でピラト総督の役を演じたとき、修道院の中庭で投げかけた、プラハの修道院の図書館で投げかけたわけではない。しかし私は、私が鞭打たせ、十字架に架けさせたプラハ人がこれに何と答えたか聞かずに（配役に従って）出て行ってしまったことに翌日うんざりした。今は何も構わない。というのは私の『知識学』に従って、彼からは私の口述したものしか聞き出せないからである。私は同時にピラトであり、十字架に架けられたものであるから（第九節）、いやそれどころか後者の父親であるから（第三～六節）、つまり無限定の無限の現実そのものであるから、私は無限のものとして自分の中に一切の真理を含んでおり、含む前に私がまず真理を形成しているのである[*1]。『知識学』は、私はそうできると証明している。私がそうできるのであれば、自ら『知識学』を創り上げることができ、これは純然たる完結した円である。

第二節

円。すべてのコンパス製造人、球面計、つまり哲学者達はその最上の原則の中でいつも一つの円を描く。彼らの体系を好んで私は建築家はその設計図の中で便所を描くように描く、つまり一つの栓を持った一つの円として描く。この栓は『知識学』の円では実践的理性のことである[*2]。どの『知識学』もその栓を取っ手として有する。

第三節

自我、絶対の純粋な自我。自己由来性[Aseitas]参照。

第四節

内在的真実体[ヌーメノ⁽¹⁾ン]。自己由来性参照

第五節

自己原因、絶対的自由、無条件の現実性。自己由来性参照。

第六節

自己由来性⁽²⁾。この絶対的あるいは純粋な自我（第三節）と無条件の現実性（第五節）、それに内在的真実体（第四節）は神の同義語である。天は — 即ち私であるが — 私が理解されるよう計って欲しい。理性は無条件の実在、自ら自らを措定し、つまり無限である現実性を要求する。この現実性の産物はそれぞれの有限な現実性である。田舎牧師はこの現実の実在[ens reale]を全く正当に父なる神と呼んでいるが、しかしその居場所に関してのみ間違っている。理性は無条件なものとして絶対的現実性を — 理性の娘を — その母親の許、母親の中でしか、即ち、自己の中、純粋な、無条件に因果を引き起こす自我の中以外には求められない[*3]。その子供をそれ以外に措定すれば、子供を母親の母親としてしまう。かくて認識の形式と物質は二つの別々の本質へ移植され、分割される。これは不合理である。

第七節

経験的自我、単なる自我、知的な意識的自我、主体。無限の（純粋な）自我はそれ自体有限な自我ではなく、従って、ある定まった自我ではなく、従ってまだ何物かでもなく、存在するものでもない。何かあるものであるためには、無限な自我は無限な自我それ自身であってはならない。しかしすべての存在は純粋な自我に由来するので、従ってまた「無限な自我そのものでないもの」もそうでなくてはならないから、「無限な自我そのものでないもの」はそのようなものとして、絶対的因果により自らに自ら対置しなければならない。かくてそれは規定され（限定され）、有限な自我、現実の自我として出現し、何物かを思い描く。

第八節

客体、非自我、拡張。表象は表象されたものを前提としているのではなく、同時に措定しており、（経験的）自我は非自我を、あるいは汝を、主体は客体を同時に措定している。この表象されたものを上述の田舎牧師の告解者達は大地とか世界、創造と呼んでおり、カント主義者は現象と呼んでいる。

第九節

観念主義。厳密に言えばフィヒテ主義やライブゲーバー主義は観念主義ではない。しかしライブニッツ主義やカント主義、合流主義⁽³⁾はそうであると私は断罪する。

ライブニッツ主義者は予定調和によってモナドを諸鏡から成り立つ宇宙の鏡としている。個々の閉ざされたモナドは全く自分自身から非自我を創り出すが、それはモナドの外に非自我として存在するのではなく、また或る自我として存在する。

カント主義者は空間あるいは容器を自らの裡に有し、それ故その中にあるもの、すべての自然を有する。我々が自然として有し、知っているすべては、そのカテゴリー表の産物カードあるいは孵化板においては我々の自我のなじみの産物である。物自体という全く無為の目に見えないフェニックスの灰は何の役に立とう。

最後に[心身]合流主義者、現実主義者に対してすらも、彼らは実はそうではないと十分大胆に私は非難する。彼らとか我々解釈者を皆苦しめているのは、世界の実在の根拠というよりは — これは全く仲介できないので — 世界の秩序の根拠であり、彼らはこの秩序を意図、根拠として、作用を受けたものよりも先に措定しなければならないので、かくて彼らは観念主義をただ無限的なものの中へ押し出し、無限な者の中に押し込めているだけである。

フィヒテは確かに非自我の現実化を物質的なスピノザ主義[*4]と名付けている。かくて彼の非自我の観念化は観念的スピノザ主義ということになる。 — それ故ヤコービ⁽⁴⁾は我々の『知識学』をスピノザ主義の裏返しと呼んでいるが、同様にスピノザ主義の転移と呼ぶことができるかもしれない。 — しかし勘違いしてはならない。非自我と自我、あるいは客体と主体は交互概念であって、両者は自己由来性の同時の双子であり、絶対的大気[*5]あるいは自我性の中の母音と子音である[*6]。

従って、私の純粋な自我が創造した私の精神（主体）は、精神が何かを見つめるべく私

が創った世界以上には、あるいはその世界と異なるとは、存在しないし、精神と世界は互いに相手を越えては一分も生きることはない。それ故フィヒテ⁽⁵⁾は十分に熟慮して自分の長い存続について[*7]空しい演説を単に訴える人として人民に行ったにすぎない。というのはフィヒテは(絶対的に考えると)確かに天や地やすべてを創造したけれども、しかし観察者としてのフィヒテも創造したのであって、万物と共にフィヒテも消滅するからである。残るものは彼の純粋な自我であるが、しかしこの自我の許では、彼が私あるいは彼によって発案された『知識学』からまことによく承知しているように、持続についても実在についても話にならないし、同様に幅や重さについても話にならないのである。

第十節

反省の至高の高さ。この高みで私は麓を有すると思う。下の私のピコ山の山麓にあるものは、私にとって決して卑小なものを軽蔑するものではないが、全く見通せない。

私の絶対的自我、「自己自身に対しては全く同等であって、その中ではすべてのものが同一の自我であり、その中では何も区別されない、というのはそれは自らに対して無である以上、一切であると共に無であるからである」[*8] — この自我は、これをロビネ⁽⁶⁾ [*9]は神という名でかなり純粋に記述しているが、つまり悟性も、理性も、意志も、意識もないものであるが、この自我は自らをまず第一に皆が同様に有する一つの経験的自我に創り直しており — しかしながら自我自体は元のままである、というのはライブゲーバーとして私は有限なものであるが、単にこのライブゲーバーの創造者としてのみ無限であるにすぎないからである — そして第二に拡張された世界に創り直す。...ここでは高みはめまいを起しそうで大気が薄くて、それで概念はもはや及ばず付いてこれず[*10]、我々は単なる言葉と共に言葉に頼って概念なしに頂上に達しようとしなければならない。さて、単なる、概念や観照を免れた言語を自在に操れる人は、言語で二つの永遠を解明する。一方の永遠は、絶対的自我が生成によって、あるいは実在なしの無規定の行為によってもたらすものであり、第二の永遠は、その自我が同時に、しかし実在を通じて[*11]、有限的であるが遂行するものである。至高の反省のこの言語なしには非自我の措定も自我の措定も、あるいは絶対的自我の自らの限定も、しばしば非難された無からの創造同様に極めて理解しがたい。この絶対的自由は、自らに一つの抵抗を(感覚的世界を)創り出すが、それは行動するためというよりは(創り出すことも行動であるからで)、抵抗に抗して行動するためであって、それはどの行動も、創り出す行動を別にすれば、一つの抵抗を前提とするからであるが、この絶対的自由はもはや我々の思考能力の及ばないもので、単に言語能力で考えているにすぎない。

第十一節

理性。理性は自らの被造物より他の被造物を知らない。理性の視力は単にその明かりであるばかりでなく — プラトン主義者がすでに肉体の目について目は一切をその光線で見ると主張していたようなもの、またストア派の人々が目は闇をも[*12]見通すと主張していたようなもので — またその客体でもある。そのため理性の目は、理性が目を超越的天へ上げると、早速天に神あるいは星として位置する。ヘーヴェル⁽⁸⁾によってティコ・デ・ブラーエの六分儀が空に獅子座の隣の星座として昇ったようなものである。

第十二節

ライブゲーター。「私自身驚くのは」（と私は脚浴の間、私の体系をざっと眺めたとき言って、足の指を意味深く見つめた、足指の爪を私は切って貰っていた）「私が万有であり宇宙であるということだ。世界では世界自身より（第八節）、神より（第三節）、それに精霊世界より（第八節）以上のものになることはできない。ただかくも長い間（この時間も私の作品であるが）座っていたら、十もの[ヒンズー教の神]ビシヌユの変身⁽⁹⁾の後で、自分は能産的自然[神の創造的性質]、デミウルゴス[世界の諸物を創る神]、宇宙の管理人に就任せざるを得なかったであろう。私は今やか⁽¹⁰⁾の乞食のような気分で、この乞食は酩酊から覚めると、突然国王になっているのである。万物を創る何という本性か、これは自らは除くが（というのは自らは単に生成するだけで、決して存在はしないからで）、すべてを創る私の絶対的自我であり、すべてを生み出し、馬の子を生み、羊の子を生み、孵化し、はち切れそうな、子を生み落とし、鹿の子を生む[措定する]自我[*13]である」。 —

ここで私はもはや足を湯に浸けておくわけにいかず、裸足で滴らしながらあちこち歩いた。「一度」と私は言った、「ひっくり返して汝の創造物を概算してみるといい — 空間と — 時間と（今は十八世紀に至っている） — その両者の中にあるものと — 諸惑星と — 諸惑星上のものと — 自然の三界と — 貧しい王国の諸帝国と — 真実界と — 批判学派界と — すべての図書館とを概算してみるといい」。 — それにまたフィヒテが書いた二、三巻を概算してみるといい。彼がペンをインクに浸す前に、私がまず彼を措定し[生み]、創らなければならないからである — というのは私が彼を生かしておくかは私の倫理的丁重さにかかっているからである — そして第二に我々二人は、私の理解するところでは、反[心身]合流主義者として、我らの自我を盗み聞きすることはできず、各自相手の作中の中から読むものを、自ら発案しなければならない、つまり彼は私の『鍵』を発案し、私は彼の印刷物を発案しなければならないからである。それ故私は大胆に『知識学』を私の作品、ライブゲーター主義と呼ぶ。仮にフィヒテも同じような考えであり、同じような考えを抱いていてもそう呼ぶ。彼はここでは単にニュートン式微分積分法でニュートンと言えるであろうし、私はライブニッツ式微分積分法でライブニッツと言えるであろう、二人の類似した偉大な男達である。かくてまた同様に多くの哲学的救世主が（カントとフィヒテが）存在する。同様に多くのユダヤ人の救世主が存在し、その一方はヨゼフの息子となり、もう一方はダビデの息子となることだろう。

第十三節

多神教、あるいは多自我教。自分の隣に他の神々や自我を有することは、モーゼの十戒が厳しく禁止しているように、同様にフィヒテの十戒が厳しく命じている。この『鍵』の筆者は、これを読み批評するすべての人々にはっきりと告白せざるを得ないが、自分は厳密な理論家として自分自身の本性より他の幾多の本性を信ずることはできないのである。というのは人々が問い、論争しているすべてのこと、つまり表象された宇宙（第八節）それに表象している宇宙（第七節）の存在について、純粋な自我あるいは神性の行動について、すべてがこの自分の本性を通じて十分に説明され、算出され、統合されるからである。不必要にいつもは諸本性が — その上無限の諸本性が — 多重化される、すべての事

物の一人の創造者、第一人者がいれば十分であるというのに。数百万の、数百京の絶対的諸自我[*14]、第一原因、自己とその他の事物の原因[神]、無条件の現実性と自己由来性あるいは神性 — 例えばヴァイマル人、フランス人、ロシア人、ライプツィヒ人、ペステイツ人、北米インディアン人、あらゆる国々と時代の人々 — こうした至高の諸本性は皆やって来て、絶えず生長し、独自の世界をもたらす（その上私はこれらを私の世界の閲覧済みのコピーとして買うはめになる）。しかし何のために、何の権利があって、どのような制限の下で、こうした大衆、知行者は存在するのかと、私は鋭い唯一神教徒、単数として尋ねる。私は上述の諸自我を、私によって措定された所産的自然、私の広い非自我の中に、この無限の堅織の絨毯の織り込まれた像として以外に、つまりそれ自身真実体ではなく、私の真実体[ヌーメノン]の限定、規定として以外に見いだせようか。 — そして私がこのことを認めるならば、彼らは、つまりこれらの私自身の流出、三つ子あるいはむしろ百万の六乗の生誕者達は、その気になれば、私を彼らの苗株、派生語、形容詞に蔑視し、彼らの非自我のモザイクの小さなピンに貶めることができるのではないか。そして息子は父なる神を創り出すことが[*15]できるのかという昔のアウグスティヌスの問が繰り返され、肯定されることになるだろう。 —

さてここでフィヒテは、私が彼に個人的に問うて、必ずしも、彼が『倫理学大系』[*16]やいたるところで印刷させていることを — 純粹理性に従えば — 通用させるわけにいかないぞと言うたびに、自分は他者の自我を、これは描かれた非自我の単なる紋章学的像にすぎないけれども、そこから解放して、生き生きした肉体を持った者として出現させて、互いに倫理的交際を行えるような誰かをただ有するようにならなければならないと私に返事をしている。まさにカント主義者が神や不死を仮定するように、フィヒテの自我は諸自我を仮定している。

私は彼に、我々がイエナで一緒に部屋の中を歩き回っていたとき、私がパイプを口にくわえたまま、彼に言ったことを思い出して欲しいと願う、そして自ら、自分は存在するか決めて欲しいと願う。

第一は、注に書かれていることである。

第二は、倫理的法はそのようなものとして自らの他は何も前提としない、存在を前提としない。神を立法者として前提としないように、神を対象として前提しない。純粹自我はある純粹自我に対して行動できない（両者とも存在や自覚を有しない）、同様にある経験的自我に対して、あるいは経験的自我として行動できないし、同様に一時的変異は一時的変異に対して義務を有しない — それ故フィヒテも倫理的義務においては超越的な生成という指数[代表者]を見いだしている。 — バスティーユの隠者や島にいるロビンソンは、ある世紀の先頭にいる総指揮官同様に多くの倫理的富を収集できる。いやカント主義者の神は空しい前世の永遠の間、ただ自分自身でいながら神聖であった。

フィヒテはいつでもこれに対して答えるであろう、こうしたことすべては自分の方がひよっとしたら私自身よりももっと良く知っているかもしれない、と。

第三に、彼が一度世界内の自我、あるいは他人の自我の現実性を仮定し、従ってそれらを自分自身の自我同様に超越的に[世界外的に]も有したいと思えば、それにくっついていく感覚世界の現実性をも、そこでのみ他人の自我に対して行動されるので、倫理的に甘受せざるを得ないであろう。すると我々フィヒテ主義者皆にとって、現実主義の昔からの灰

色の雪塊が、我々が前もって熱くなってインクで溶かしてしまった雪塊がまたドアの前に迫ってくる。我々の体系的惨めさは看過し得ない。さてかの雪塊に踏み込まぬために、フィヒテは次のような跳躍の杖をつかむ。

私、ライブゲーパーは例えば七〇人以上のK（例えばカント主義者や反ライブゲーパー主義者）を餓死から（例えば書籍商あるいは招聘する侯爵として）救出できる、従って私はそうすべきである。つまり（彼はそう仮定する）私は夢にこう見る[*17]、七〇人のK達が胃に胃液しか有しない、と。このK達が幸いなことに同じことを夢に見る、それは単に我々が皆倫理の宗教的宿題を、つまり若干の禁欲的規範の時禱を得るようにするためである。さて私が七〇人の悪漢に何かを与えようとする、本当に与えるという夢を私は見る、彼らは受け取るという夢を見る。しかし実際は我々は皆、我々のベッドにヴルカンの鉄の輪や綱と共に縛り付けられていて、互いに夢以外の現実的なものは何も分かち合っていないのである。

いやはや、三日三晩私はこの命題に対して出征したいところである。一つには（先の「第一に」と混同して欲しくないが）、L（私のこと）は、七〇人の弟子達とすべての客観的な関係なしに暮らしているが、自分や彼らが皆、時間、空間、夢において一致しているかどうかやって調べたり、問い合わせしたらいいだろうか。私はかつて獵師がそうしたように、イエナの窓から外に倫理的な公開射的を行って、ハルツの森で一頭ののろしかの雄を仕留めようと待ち構えていないだろうか。というのは、私は十八世紀のここで飢餓と生計の夢を見ているのではなく、一方七〇人の翻訳家^(1.1)達はシリウスで一世紀あるいは三十世紀の空腹と私の慈善を夢見ているのだということを誰も私に保証できないからである。

仮に、私が自らを措定して、倫理的に新たに何かを仮定する、つまり夢想者達と諸夢の同時性を仮定するとしても、残念ながら自分の周りに執行権力を目にしない、これは我々神々の自我、至高の者達の外部あるいは間にいて、圏会議開催の通知者として出現し、諸夢の一致とか神経中枢のためにせめて幾ばくかの配慮をするであろうものである。一しかし誰も見えないし、聞こえもしない[*18]。

二つ目に。仮に我々は見知らぬ手によってある同時性が贈られているとしても、これほどどうにかなるものでもない。私の周囲は私の非自我で囲まれている、この非自我には人間的形姿の死んだ蠟人形陳列室が組み込まれているのである。これらの蠟人形や先祖肖像画は本来他の性格仮面同様に私が踏み潰していいものであろう（というのはそれらは単に私の産物であり、何の絶対的自由も自我も有しないのだから）。他人の、これに相応する絶対的自我はこの像とは何の関係もない。その自我はすでに（類似の）像を自らの非自我の中に有する。それ故この体系に従うとすべての自我によって、他人の出会い、早速措定する諸自我が存在する限り、それだけの数の多くの肉体が自らの肉体の外部を動き回っている。それでも聖別式[*19]で、ある神がこれらの彫像の中に吹き込まれるのではないので、単にこれらの彫像に対する過失を、ローマ皇帝の彫像に対する過失のように[*20] 一一つの不敬罪と見なすことにしよう。私は魔女達のように像で遠くの原像に出会うことにしよう、カトリック信者が聖人像で聖人や神を敬おうとするようなものである。それ故ベラルミン^(1.2) [*21]は実際こう言っている、像の中にはすでにそれ自体何か神的なものが原像を顧慮せずとも存在する、と。 一 こう私はすべきだろうか。 一

いやはや。これは何になろう。原像そのものには（それが存在するとしても）私はこう

してもびた一文もたらさない — 原像の価値と天は原像が自らの中から紡がなくてはならない。 — 原像は私にも期待されない。単なる、私の倫理性の実行するモデル人形、共演者が、私が舞台上で贈り、愛する眼前の他人みたいな見本人間であって、だからといってこの者は何か利益があるわけではない。単なる有徳の舞台上の芸がその際利益を得ることになる。私の絶対的自由あるいは自我性は、行動し反応するために、前もってこの抵抗（非自我）を自らに行う。この自由はスヴォーロフ⁽¹³⁾の父親に似ていて、これは自ら金を借りて、手形を振り出し、しばしば手形の拒絶証書を作成し、自ら手形法に従って十分厳密に取引するのである。絶対的自我性は単に自らの賛美のために一切を行う。しかし神の意欲は行為であると、私は神学者達と共に言う。神の（すなわち自己由来性の、あるいは私由来性の）言葉は即行為実現である。要するに内部の行為が一切を形成し、外面の行為は単に見かけ上外部の行為にすぎない。

いや他人の自我は、劣等な俳優同様に、舞台では単に立像（肉体）かあるいは精霊（純粹自我）を演ずるので、そして決して両者を一人の人間として演じないので、私は立像を、私はそのピグマリオンであるが、砕くことも息吹を吹き込むこともできよう、私がその石工であることをまことに歴然とはっきりさせる術がありさえすればの話であるが。しかし私はそれはできない。それに私は私と出会う諸立像を毀損したいとは思わない、修復したいと思う。

否認できないことであるが、私はライブゲーバー主義を奉じて以来、他人のために多くの外的準備をして、高貴な、あるいは偉大な犠牲を自分が払うたびに — これは単に私の自我が倫理的に曲馬をすることになるので、より手短に済まされることであろうが、 — モンテーニュ⁽¹⁴⁾の描くあの商人のような気分にならざるを得ないことがある。この商人は浣腸をするために、テーブルに諸道具やすべての混合物成分を用意させて、すべてをざっと見ると、その後早速、本当に浣腸をしていないのに通じを得るのであった。ただ一回だけうまくいかなかったが、彼の妻が吝嗇からより安物の薬剤を持ち込んでいたのである。

第四に。何の権利があって私は必然的に他者の非倫理性を措定するのか。自分の外部の絶対的なものの何の全知に従って、私の絶対的自由は他者の絶対的自由の非倫理的使用を類推するばかりでなく、自らの使用同様に確実なものと措定して、そのために私の絶対的な自由は倫理的に行動することになるのか[*22]。

しかし他者の罪人を仮定しないならば、視覚的罪人は単に私の演習の倫理的曲馬に過ぎない。しかしこれも進捗しない。まことにハイネック⁽¹⁵⁾がすべての惨めさの原因とした字母分解、特に読むことの無能力、これは哲学することに比べればさほどひどいものではない。哲学することは超越的な字母分解であって、これはやはり自然の本を読むことを難しくしてしまうのである。

第五に、私には諸惑星の顕著な多さというよりも世界の多さが致命的に思われる。というのはどの宮廷鼓手も、仕着仕立屋も、ペシエレ⁽¹⁶⁾人も、要するに十億のこの世の人間が星空の生きたダイヤモンド坑として、銀精錬所、砒素精錬所、星精錬所としてやって来るからで、そして誰もが自分の創造した天と、動物や一切を含む地とを持ち運び、胃の上には自分のために演ずる世界の覗きからくりを有するからである。私が新たな作品「非自我」を措定し、創造し — つまり旅すると、 — 同時にかなり多数の新たな自己由来者、私由来者を見いだすことになる。六一七一の神々あるいはポルト・ドゥ・デュ[*23]を私

は一七八八年ヴァイマルで措定できたし、イエナでは四三四四の同様の者を（学生や職人の若者は含めない）措定できた。いかなる超越的な規則に従ってこれらの神々の大衆の群れは生じ育ってきているのか。昔の神学者達のように、一人の絶対的自我と神々しい本性（と同時に単に一つの創造）を仮定し、その上すぐに、この至高のポストを管理するに十分な知力を有するような一人の主体を召喚するのがより素敵な考えではなからうか。するとその召喚はその実存に確信ができる唯一の者に対してなされることだろう。それは私自身のことに他ならない。

最後に家畜でさえ私の側に立つことになる。家畜はさもなくばフィヒテによって真のボシャー⁽¹⁷⁾ルの『聖動物辞典』になるであろうものである。というのは私は動物も感受する対象として、従って倫理的対象として[*24]、客観的に仮定しなければならないからである。— これは記すのは簡単であるが、しかし何という結果になるだろうか。動物は皆半神ということになる。— エジプト人はその動物礼拝で、私がかつて思っていたよりも救われている。— どの動物も変成的一個の世界を措定し[生み]、創っている。抱き猫は彼らの女神、女性支配者の母親である。— 馬は騎乗者を措定し[生み]、兎は土地貴族を措定し。— 鼠は、デグゲンドルフでは神々しい祭餅を喰ったのだが、それ自身は祭餅同様に神々しい。— 鼠とミサ司祭によって祭餅はただ置かれるだけである。— それからこのパンテオンでは（私は博物標本陳列室と動物園のことを言っているが）ますます下って、ただ叙事詩の中でのみ呼ばれる（ホメロスとピーター・ビンダー⁽¹⁸⁾によって）動物に至る。— 戯れる蜻蛉は二時間、まずは沈んで行く太陽を措定し、それからその雌を措定し。— それから私の中に腸寄生虫が生じ、これが神々しく措定しようと[生もうと]する。....（第三節から第八節）。

これらは悪魔にさらわれる。こうなれば世界の最良のシステムも愚かに馬鹿げたものになろう。真の結果は教皇自身よりも幾多のより平板な神々やラーレン[家の守護神]を創ることになろう。

呪物崇拜の項[*25]で、私は私がまだフィヒテ同様に自分の隣に別の神々を有し、措定していたとき、何と滑稽に以前世界を見ていたか、その見本をお見せしよう。

このような証明の後には悠然と私はライブゲーバー主義者の学派の分裂を期待している。少なくとも私は何人かのライブゲーバー主義者が以下のことについて熟慮と疑念に導かれることを希望している、つまり私一人の他にまだ何かが存在するであろうか、私というこの万物の十分に合理的非合理的の根源。— すべての船や織工のシャトル。— 世の営みの振り子。— 存在の心臓。— 宇宙の創造主。— 一つにして万事であるものの他に。

フィヒテが私の根拠を十分なものと思えば。— 衷心からそう願いたい、— そうなると彼はきっと自分が存在しないと最初に告白する男となろう。このような件でただ健全な人間の分別のみが見いだすようなつまらぬ矛盾には平然としてそう告白するだろう。あるいは少なくとも私は存在しないと言うだろう、これに対しては（私には私の実存は十分に確かなので）彼を犠牲にして私の利となるように説明するつもりである。

第十四節

呪物崇拜。以前私のライブゲーバー趣味は幾らか同様のものだった。私が以前、まだフィヒテと共に全地球を一つの基地、神々の基地としていたとき。— 人々をどのように私

の汎神論的体系へ裁断していたか、おかしな冗談である(しかしそれ以上のものでもない)。一人の哲学者という私に付属している真面目さは全く私から消えたように見えた。しかしそれは外見にすぎない。内面で私は顔をしかめていた。

例えば鷲ペンを持った記録用ガレー船の退屈な空腹家、不機嫌な政府の官房書記、帳簿係、会計局職員、会計書記が漕いでいるのを目にすると私はこう尋ねるのだった。「これらのすべての神々しい人間達、素敵な、宇宙を進む惑星船隊の巧みな船大工達は、なぜ今となつては(宇宙を単に保管しているだけで)勘定の他は何もしようとしないのだろう、勘定[数]は別の哲学者達によればまさに世界の構成要素だったのであるが」。

私は十二人の帝国大審院の使者を見たら、こう言った。「君達本来の意味で善良な十二人の神々の使者、使徒よ。君達の創造は、文体を別にすれば、星座から君達の杖に至るまで十分に結構なものだ。しかしヴェッツラーではそんなに多くの時間を費やさず、むしろ互いにもっと多くの陪審員と大審院税を置くことにしよう」。

騎士領所有者を目にしたら、私はこう言った。「上級神として思うに、汝は汝の高祖父とすべての系図の父となる。生産する階級が汝の生産物であるようなものだ。汝は得意に思ってよろしい、しかしそれは単に『知識学』(第六節から第八節)に従つての話だ」。

一人の侯爵を見かけたら、私はこう言わざるを得なかった。「汝の国家と他の諸国家の創造者よ、アメリカを創り、アメリカであるコロンブスよ、すべての軍の総指揮官にして、すべてのアカデミーの養育者達の養育者よ。汝の絶対的自我は宇宙の全集を、ゲスナー⁽¹⁹⁾が自分の全集をそうしているように、同時に作り、印刷し、銅版彫りをし、販売するので、そして我々すべての神々は、汝の国家の馬車を、ギリシアの神々が愛の神の馬車をそうしたように、轆の馬として引っ張っているのだから、汝の手が枝として運んでいる測りがたい宇宙林檎[皇帝の印、帝国地球儀]の十字架を折り取ってしまうがいい。あるいは世界を救い出し、一匹の羊であり、十字架を担う一人のイギリス皇太子あるいは無限の息子を創り出すがいい。申したように、皆が皇太子を中心に回転している」。

侯爵夫人を見たら、私は時に何も言わなかった。女達は私やフィヒテが神々となる前に女神達であったのだ。いや女達は地球のように、神々の母、神を生む者達、つまり我々の母である。

我々の学派の哲学者を一人見かけたら、私は彼の肩を強く叩いて、こう言った。「クネフよ、親愛なるクネフよ[*26] (というのはそなたの知識学教授の舌は卵、自我、この世の跳ねる点[心臓]を生むからで) そなたは確かに何でも知っており、神々しい独学者で、読む量は少ない。そなたは本の中には自らが考えたものしか見いださないからで、むしろ執筆の椅子に座っていて、ウェスパシアヌスと共にこう言うのを好む。思うに私は一人の神となろう。いやそなたが受験生として話すというよりはむしろ汗をかいているとき、それは単にそなたが、我々が夢の中で遭遇するように、自分の知っていることをすべて試験官に貸し与えるからにすぎないだろう。しかしなぜそなたは二十世紀を創造して、自惚れて後世の隣にいて歩き回っているのか。それは確かに純粹に哲学的なことではあるが、丁重なことではない。我々他の至高な者達と共に十八世紀を創り続けるがいい。我々の前には諸世紀を作るといふ一つの永遠全体が見えていないか」。

勲章の綬の中のやくざ者、民衆の殺人者、国々の盗人、血に飢えた男、貞淑な乙女達の残酷な鉄の乙女、あるいは娘達の[九月]大虐殺⁽²⁰⁾者を目にしたら、私はマニ教徒、糞信仰

⁽²¹⁾者 となって、こう言った。「ここではアリマン[闇]とオロスムツ[光]とが一人の男となっている。フィヒテの神とエルハルトの悪魔⁽²²⁾は特性の共有ということになる。この件は説明しがたい、たとえ、我々に生来の悪の証明はフィヒテの『我が倫理学の大系』一七九八年、ガブラー社で読まれてきたにせよ。絶対的的自我、あるいは神々しい自我が罪を犯し、悪魔的自我になる。絶対的自我が分別を有し、ある非自我に至るならば（知的自我になるならば）、そういうひどいことになるのであれば、分別とか啓蒙、創造、同様なことを何と考えるといいだろう」。

私のライブゲーバー主義を植字する水症の両脚の植字工を見たら、私は敢えて何か気の抜けた言葉遊びをして、こう言う。「なぜ病気の主なる神、デミウルゴスは単に生むことの生むこと[植字すること]のみを生むのか」。

私が私の妻を見たら、私は宇宙を観察して、自らを宇宙の活字父型と見なし、彼女を活字母型と見なして、こう言ったことだろう。「まあまあのパンテオンで、単に二人の神々、軍神[火星]とヴィーナス[金星]のみが見られて[*27]、他を代表している」。

絞首台の一人の盗人の側を通り過ぎたら、つまり飛び去った神と蛾[夜の鳥]のつり下がっている蛹を目にしたら、私はこう計算せざるを得なかった。「消え去った盗賊の神のこの非自我の断片を仮定するよう、私に倫理的に強いることはもはや誰にもできなかった。しかしながらその自我の外皮はまだつり下がっていた。いずれにせよ我々倫理的生き物は総じて我々と同数の垂れた肉體の見本を植字し、出版しなければならなかった。ただ垂れ下がった[処刑された]自己原因が植字した[生んだ]肉體、原本のみは絶版となっていた」と。

教皇がローマで私を祝福したとき、私は教皇をキリストの名代と宣言せず、キリスト自身と宣言した。というのは教皇をキリストとして、正統派信仰が私に教えていた特徴に従って認識することは容易なことであったからである。教皇はその正規の絶対的自我を — つまり神々しい性質を、 — その経験的自我を — つまり人間的魂を、 — その非自我を — つまり肉體を有していたからである。 — このような神人はペトロやユダに始まって、多分どの枢機卿も — 領主司教も — イエズス会総会長も — 宗教局評定官も — 懺悔の牧師もそうであって — 例えは私自身このようなすべての下僕[教皇のこと]ではないだろうか。

精神病院に来たら、私は勿論隠しておけないことであったが、驚いたことに、その病院の神々や第一原因は例の著者達、つまり著者達自身よりも作品の方が賢明である著者達に似ていたのである。要するに狂人達は立派に秩序付けられたマクロコスモスを措定していたのであるが、自らのミクロコスモスは台無しにしていたのである。「なぜ神は」と私は言った、「またしても客体に対してとても顕著に臆して、主体に対してはそうではないのか」。

私は私の最も古くからの友人を見たら、「私は私」としか言わなかった。

フィヒテを見たら — 私がカストルで彼はポルックスなので、そしてまた我々二人は単に措定による交替的な不滅によって存在していたので、ただこう述べる習慣であった。「友達でいよう、⁽²³⁾オーギュスト」。 —

第十五節

ゲッセマネの庭での一人の神の悩み。これについては私は神受難論者、天父受苦論者⁽²⁴⁾なので受難の歌を歌う術を心得ている。スコラ学者達は神は欲せぬものか欲するものか[*28]批判的質問を投げかけていた。私は経験から話すことができ、こう述べる。いやおうなしだ、と。神なる人は私と共にこう告白しよう、単なる侯爵の方がまだ、と。この点に関して私の四つの嘆きを聞いて欲しい。 — 私の最初の嘆き⁽²⁵⁾はこうだ。私は — 絶対的に考察して — 私の創造する永遠のこの方ずっと座っていて、盲目で、意識がなく、私の不可視の測りがたさを何か濃縮したものに凝縮して、私のエーテルを稲妻にし、それからここで執筆している経験的な、かなり分かりやすい自我を得ていて、そして常にその背後で創り続けているが、自分の世界をほとんど知らないこと、シュタールの魂⁽²⁶⁾が体の部分を知らないようなものである。ギリシア人も、夜を一般の神の母胎としたとき、このような考えであったし、エジプト人も、もぐらを単にその盲目のせいで[*29]神々の中に招き入れたとき、同じような考えであった。夢遊病者が説教や他の論考を仕上げるように、私も意識のないままに、諸世界を創っている。私（経験的自我）は私（絶対的自我）がこわい、私の中に住んでいるぞっとするデモルゴン[*30]がこわい。

私の第二の嘆きは、私が確かに多くの分別を有するが、しかし十分ではないことである。モイゼルの『学的ドイツ』⁽²⁷⁾には、もっとそのことを嘆いてよい国内の神々で一杯の幾全紙がある。私は認めるが、分別というものは称賛に値し、無限なもので、（本来の意味では）人智の及ぶものではない、このことを私は（絶対的本性として）万有の（非自我の）全ての摂理の中で証明してきた。しかし私は自身の主観的分別をかくも継母的に、貧弱に嘔みつかせてしまって、今やそれが私の客観的分別そのものを理解できないとは自分が何を考えていたのかわからない。動物達はヘルダ⁽²⁸⁾ — によると分別が減ずるにつれて機械的なものが増えるそうだが、私は動物達の低い場にいるのではないだろうか。いやはや。私は（経験的に）最大の頭脳と、このような宇宙の宇宙的天才となるべきであったろう。しかしながら私の上述の自我は、ただ自分のために表象へと配置された客体について、根本的にはほとんど何も理解できないのである。

更に非自我は（絶対的なものとしての私によって）突然片付けられる、経験的自我はしばしば四十年しないうちに片付けられる。 — 更に、非自我は互いの価値がかなり同程度に創られていながら、諸自我は皆それぞれ異なる。この差異、あるいは先の同等は一つの不思議である。従って私が（自己由来者として）私の二重の人間化の際に、あるいは客体と主体への変身の際に（第七、八節）客体のために掲げている旗幟の党派性は明らかである。それも私が一つの太陽としてこの二重の虹の中で多彩に自らを屈折させながら、哀れな主体を単に色褪せた逆さのコピーの虹にしているように見える程であって — かくてこの物悲しい件で快活なる言葉遊びをするならば — 魂の牧師というよりは正しくライブゲイバー[肉体提供者]という名に値するほどなのである。

私は（知的な自我として）ドイツが現在育てている最も深淵な賢人であるとして人は私を慰めようとするであろう。私の敵にさほど利を与えずとも、私はそのことを容易に認めることができよう。カントはその批判のために一〇九五七夜と二分の一を、つまり三十年を要した。フィヒテはひよっとしたら三ヶ月も要しなかったろう（というのは読むことは創ることだから）。しかしその『知識学』を発案するにはそれだけに数年を要した。これに対してこの難しい『知識学』の作品を創るのに私は一ヶ月かかった、あるいは分かりや

すく話すと、読むのにかかった。かくて人は次々に相手に勝る。私の二週間も要しなかった『鍵』をある阿呆はいわゆる読書で二時間したら仕上げてしまうかもしれない。しかしこれでは全く余りに自明なことだが、後世の自我がどれもいつでも、なぜか、何によってかは分からないまま[*31]、先の諸自我のすべての発展を[*32]、つまり幾世紀もの富を、わずかな年月、時間のうちに創り上げてしまうことになる。最後の者が（本来の意味で）最初の者となるであろう。

これが、フィヒテ同様に、自己の神性よりは多くの諸神性を確立したときの様々な悪しき結果の一つである。例えばある図書館の単純な火夫の存在に同意してみるといい。一つといわず千もの嘆きを有することになる。というのは火夫は — これはちなみに神を代弁していること、例えばアレクサンドリアのクレメンスによればテスピアでは一本の丸太が、サモスでは一枚の板が天の女王ユーノを代弁しているようなもので — その間に自然をその自然の無尽蔵の低級高級な数学と共に創り上げたばかりでなく（それどころか創り続ける）[*33]、自分の主要作品に関する立派な数学的作品、その他の作品を創り上げたのであって、彼が毎週暖房する図書館のすべての言語はその文字と図像に関して（彼によって生産された非自我の部分として）全く彼の作品であり産物であると言えるからである。にもかかわらずこの従者には決してその内容は、つまり文字の精神的意味は教えられない。それでもそれがうまくいって、彼がついにオイラーの解⁽²⁹⁾析⁽³⁰⁾やエルネスティやライブゲーバーの『鍵』を、あるいは自分が普段暖房しているものを理解したとしても、彼は単に自分が先に印刷させたものを学んでいるにすぎず、（何人かの哲学者達のように）まず表記に従って概念を発案しているにすぎない。本当は吐き出しているのに飲み込んで見えるかの石像の泉の動物達に似ているのである[*34]。もっと高貴な話し方をすると、彼とか学ぶ者はすべて私の知人のウィーンの伯爵に似ていて、この伯爵は禿げ上がった後頭部に可愛い模造の弁髪を結んでいたのだが、これは以前に抜け落ちた自分の毛髪で作ったものだったのである。

私の嘆きの展開はどうなっているか。 — 私は二つ目の嘆きを終えていない。私は先に述べたが、私自身はフィヒテ主義者あるいはライブゲーバー主義者として偉大な哲学者であると聞いており、私は偉大なスコラ学者アレクサンデル・ヘールズのように不抗弁博士と呼ばれているようである。私は更に話を進めて、その上こう記すことにする、私とかフィヒテを理解する人はまことに少なく、私を論駁する者は誰でも（私自身であれ）そのことによって最も確実に示しているのは、その者は（同様に私自身も、私を論駁するのであれば）私のことが分かっていないということである、と。学生達は（私はフィヒテと共に告白するが）私の中に入ってくる。まだ冷静な者達[食事を摂っていない者達]は（私は比喩的に言っているが）、あたかも生理的に胃が空っぽであるかのように、より容易に病気を仮定したり、あるいは食事を摂って、より強固にそれを消化する。すでに先行する諸体系、私の体系の曾祖母を知っている男達はそれができない。しかし私がエジプトのアルヒアキム・ビラムヴィラのような成功を収めたら、私にはどうしようもない、つまりこの男は一万六千の署名によって自分を神と宣言させたのであるが、ある体系がナポリでのオペラ・ブッフア[喜歌劇]のように（どんな阿呆も哲学するので[*35]）四十五回引き続き上演され、真似て歌われ、加工され、消化されたら、私にはどうしようもない。そうなるかとカッコー時計は真のカッコーに比べて感激を与えない。二十年後はわずかに個々の肢体

が全く野蛮な余所の諸体系の中へ釘付けにされて生きることになる。これに対して詩的な芸術作品はオペラ・セリア[正歌劇]のように一度上演されるだけで、まだ百年後も全体を保っている。

第三の嘆き。この嘆きの歌に関しては、一 殊にこの戦局では 一 一緒になって歌わない無限の本性[生き物]はヨーロッパでは少ないことだろう、つまり人は自ら、非自我と呼ばれる途方もない圧倒的な巨人を創ったけれども、今やこの巨人によってサトゥルヌスの神が三人の子供達によって(地球と海と地獄の支配者達によって)そうされたように、束縛され、去勢され、王冠を奪われているという歌である。ラーヴァータ⁽³²⁾は[*36]、いつでも(かなり彼が証明しているように)天才達や植物、諸惑星、天国を創ることができれば、別世界で自分の運をためせると信じている。しかし彼はここ下界で、それがどういことになるか見ることができる。我々絶対的諸自我は皆とてもたくさん創り上げたが、しかし自分達をむしろ地獄の上に置いてしまった。少なくともここでは客体性に対する絶対的自我の党派性、昔からの、当世の審美家達によって模倣された党派性は見間違いようがない。哀れな小人の主体を盲目の一つ目巨人のポリュフェモスに対する戦場に駆り立てる代わりに、均衡のために主体に対して比較的諸力を与えるべきであったと思われるのであるが。フィヒテ⁽³³⁾はこの世を我々の神的自我の反映と呼んでいる。老自由思想家エーデルマン⁽³⁴⁾はこの世を神の影と呼んでいる。この方が私には好ましい。というのはこの影はリリパットの知的な自我をまことに凍えるほどに暗くし、冷たくしてくれるからである。

白状すると、絶対的自我性、あるいは自由が、フィヒテの欲するように、この世を創ったのは、単に行動のための抵抗を得るためであったとすれば、そうすると多くのことがびっこを引くように思われてならない。私の自由な宗教的修業にとって、多くの私を誘惑しない星々や、島々を含む大陸、先の世紀、甲虫、苔、すべての動物界や植物界は必要であろうか。スロウンのような人が神の存在を胃から証明し 一 ドナトゥスは手から 一

マイヤーは蜘蛛から 一 メンツィウスは蛙から 一 シュテンゲルは不具者達から 一
そしてシュヴァルツは悪魔から証明している[*37]からといって、逆にまた同様に簡単にこれらの拾い子の存在は神的な自我から演繹されるだろうか。一 というのは殊に最後の拾い子、悪魔を、つまり他者の非倫理的な存在を考えてみるといい。自由な自我が自らに対置するこの抵抗は余りに強力であるということに至る所で見いださないだろうか。フィヒテは彼の『倫理学』の第十六節で悪を、つまり純粹なる自我の敗北を、官能世界の優勢に、つまり自我が自分自身に対して余りに大きく措定する抵抗に由来するとしていないだろうか。

結局どのような関係を、天文学的歴史的な非自我の同形の、経験的諸自我の後方、前方に達する展開は私の自由な行動との間に有するのか。(この展開はすでにそれ自体不可解なものである)。疑問だらけ、困ったことだらけである。

第四の、そして最後の嘆き。結局何よりも嘆かわしいのは、一人の神が送らなければならない退屈な、目的のない、上品な、島国的生活である。神は交際するものを有しない。私はずっと永遠の間座っていて、できるだけ上手に[*38]天下って、自分を有限なものにして、せめて何かを有しようとするが、しかしより小さな侯爵達のように、周りに真似て話す被造物しか有しない。かのベルリンの二人のフランス人、彼らは全体的長い神学的法学的、すべての望ましい対談をしようと申し出て 一 それを続けてきたが 一 それは

各人が相手にいつも貴殿はと様々なアクセントで話しかけることを通じてそうしてきたのだった。 — 彼らはそれでも、上述したように、二人である。しかし私は彼らとどうして競い合えよう、私は永遠の前半を通じて — 後半とてましになるわけではなく — 自分に対して貴殿はと言うしかないのである。 — マダムとかそれどころかビービ[*39]とせめて一度振り向いて言えるようであれば、なにがしかのことではあろう。

ある本性は、それはどのような本性であれ、いずれにせよ至高の本性ならば、何かを愛し、敬うことを願う。しかしフィヒテ的ライブゲーバー主義は私にそのために何か残すことをしない、かの乞食の犬すらもあるいはかの囚人の蜘蛛すらも残さない。というのは仮にその両動物が存在するとしても、私や犬そして蜘蛛が描く我々についての九枚の像のみが何か我々と関係があるのであって、我々自身は何の関係もないからである。

私自身よりも何かより良きもの、どの愛でもその炎を燃やす対象、それが全く見あたらない。いずれにせよ、数千年前から、四指幅ほどの僧正の肩衣ほどの狭いものとなっている愛の外套は、今や完全に燃え尽きている。人は愛するために自分の愛以上のものを有しない。まことに、人間がいて、私は員数であればいいと願う。

私かフィヒテ、あるいはこの二人を悪魔が誘惑して、私どもが措定するとか反省するとかしないように計らってくれさえしたら、この件はうまくいっていたことだろう。私は以前はジュピターとして自ら可愛い人間の姿をして、私の被造物達を楽しみ、傾聴してきた。しかし今はどうしようもない。どの神性も、まだ仮に一つの神性が仮定によって得られるのであれば、私同様に厚く閉ざされた氷の最高天に座していて、私が地球と十八世紀を夢見ているとき、ひょっとしたら三十世紀と天王星を夢見ているかもしれない、そしてその自我の一弦琴、つまり永遠の諧調の唯一の弦に聞き入っていよう。

我々の行為、洞察は、ヤコービ⁽³⁶⁾が言っているように、行為の行為であり、洞察の洞察である。私が付言すると、単に対鏡のただの対鏡である — この無限の反復とか対鏡は最初は反復よりも何か別なものを反復していたはずなのであるが、そして我々はかの『告知者』⁽³⁷⁾に掲載されていた猫同様に惨めに暮らしている。この猫はイギリスのケチな男が、餌を与える代わりにただ脂身の革紐で撫でてやって、この猫は生きるために一日中自らをなめなければならなかったのである。 — シェリングは確かに彼の『自然哲学』の中で、最初自分にとって自らの神性についての果てしない虚無へのこの展望はひどいもの寒々しいものに思われたと言っているが、しかし結局、内的な — 創造が自分を快活に元気にさせたと言っている。

しかしなぜ創造なのか。 — 創造と行動はそうになったら単に、動くために動かせるツインマーマン⁽³⁸⁾的運動機械となってしまう。私が残念ながらはなはだ案じているように — まさに貧乏くじを引かざるを得なかった哀れな犬の私より他に存在しないのであれば、私ほど哀れなものはいなかったであろう。私に許されているすべての熱狂は論理的なもので — すべての私の形而上学、化学、工芸学、病理学、植物学、昆虫学は単に古い原理で成り立っている。汝自身を知れである。 — 私は単に、ベラルミン⁽³⁹⁾が言うように、私自身の救世主であるばかりでなく、また自らの悪魔、死に神ハイン、革鞭の親方である。 — 実践的理性そのものは(飢えた哲学的ダビデにとって唯一の神聖な供えのパン⁽⁴⁰⁾)であり、私をかりうじて動かせるが、それは単に私が他ならぬ私の自我のためにだけ何か良きことを行うことができるからにすぎない — 愛と賛嘆は空虚である。私は聖

フランシスコ同様に私が（トリックの）胸に抱き寄せるのは、私が雪で丸めて作った少女に他ならないからで — 私の周辺には広大な石化した人類がいて — 暗闇の人気のない静寂な中では、愛も、賛嘆も、祈りも、希望も、目標も輝かないのであり — 私は全く一人っきりで、どこにも鼓動するものはなく、生命はなく、私の周りは無であり、私がいなければ、無の他は何もない — 私がただ自覚しているのは私のより高い無の自覚で — 私の中には沈黙したまま、盲目で、蔽われたまま働き続けるデモゴルゴンがいて、私は彼本人である — このように私は永遠から来て、このように永遠の中へ行く — 誰が今嘆きを耳にして、私のことを知っているか — 私である。 — 誰が嘆きを聞き、誰が永遠の後、私を見分けるか。 — 私である。 —

- *1 デカルト主義者によると、 2×3 がいくつになるか等は神次第であった。ライプニッツ『弁論論』、II、第一八六節。
- *2 『全知識学の基礎』参照。一七九四年、九五頁、九六頁。
- *3 『全知識学の基礎』の第三部全体と、その前の第一部と第二部参照。それにネーブ等、七六頁等、八八頁等。
- *4 『全知識学の基礎』九四頁と四七頁。
- *5 アナクシメネスは大気を神性とみなした。キケロ、『神々の本性について』I、10。
- *6 というのはどの母音もやはり子音を、子音が母音を前提とするように前提とし、音調は舌、唇等の何らかの関係を前提としているからである。
- *7 『訴え』の箇所、そこでは自我は銀河等を越えて残ると言っている。
- *8 『知識学』二五一頁。
- *9 『自然について』第二巻。
- *10 というのは我々は被造物として創造については思いようがなく、創造者としては意識を有しないからである。自我は無限のものとして自分を考えない、そして有限なものとしては、無限のものを考えるのにまた十分に広くない、無限なものなしにはまた有限性は考えがたいのである。ここでは単に純然たる言葉が、その際に思い浮かべようと思うすべてのものよりも役に立っている。
- *11 かくてまたスコラ派の疑問が解ける。つまり被造物は創造であるか否かである。明らかに否である。というのは措定は措定すること同様に永遠であり、作用は原因同様に古く、有限性は無限性同様に古く、神の息子は永遠であるからで、どの件も互いに同等であるからである（ヤコービのスピノザ、第二版、二七頁）。 — ちなみに、私は誤解されてきたスコラ派の哲学は現今の私の哲学にとても似ているように見えるので、誰かが両者の類似辞典を書いて欲しいと思う。例えばクラーマーのボッシュエの第五版の続き⁽⁷⁾では（かなり薄い）スコラ学派の輪郭に目を留めて欲しい。例えばアラヌスが四五六頁で、父なる神（純粋な自我）は実体に素材（非自我）をもたらし、息子の神（経験的自我）は形式（観照形式、思考形式）をもたらし、聖なる精霊（倫理的世界秩序）は結合をもたらしたと言うとき、この男は私以前にすでに考えていたことが分かる。同様に三六四頁ではアンセルムの神の存在についての証明に対してガウニロンの現在物真似されている非難を読むべきであろう。 — これらの論理的剣士の許では論理的熱狂が我々自身の許でよりもより純

粹であるように思われる（彼らに続くものは出なかった、四九八頁等）。

*12 両方ともフランチェスコ・ピコ・デラ・ミランドラ[1469-1533]の『異教徒の学問の空しさの吟味』第一巻。

*13 後の三つの分詞は獵師用語。

*14 絶対性は確かに数、つまり多数を排除するが、しかしまさにそのために単一性をも排除する。

*15 『三位一体について』、ペトルス・ロンバルドゥスが、第二巻、第六編で引用している。[正しくは『命題集』第一巻、第七編、アウグスティヌス対マクスミヌス]。

*16 なお二一四頁でもこう言われている。「それがなければ、そもそも義務はないだろう、ということは絶対的に真実である。このことを真実と見なすことが義務である」。綜合文の前半は循環しており、そもそもこう問うことに等しい — まさに逆の倫理が倫理的であるならばどうか、と。後半の文は — 誰も意見のせいで良心の呵責は有しないので — こういうことに他ならない。こうした場合 1) 調べるのが義務である — 2) それ が真実であるように行動することが義務である — 3) それ が真実であると欲することが義務である — 4) 困ったときは自尊心に逆らうよりは理性に逆らうこと、悪漢よりは懷疑家であることが義務である。というのは意欲と信仰は同一基準では測れない大きさであるからである。意欲と信仰の間では移行は、レッシングが歴史的眞実から必須の眞実へ移行するのを難しいと思ったよりも更に難しいものである。

*17 ただ鈍い読者のためにフィヒテ的（結局はライブニッツ的カント的）表象を思い出させて全く一般的なものにしたいが、つまり自我同様に多くの世界があるのである。そして誰もこの自分の直接的に創られた、間接的に創られたのではない夢の世界から他人の夢の世界へ出ることはできず、これらの諸世界はあたかも一つの世界であるかのように、そして我々皆がその中にいるかのようにまさに予定調和をあるいは類似性を互いに有するのである。編集者の注。

*18 というのはフィヒテの所謂倫理的世界秩序は確かに私の自我と非自我の間に楽天的調和を導入するであろうが、しかし私の自我と他人の諸自我、非諸自我、それにそれらの倫理的世界秩序の間には決してその調和を導入しないからである。

*19 聖別式でまず神は立像の中に入る。それに対してアルノビウスは『異教徒論駁』[VI、19] でまさに反論している（一人の神が幾多の立像の中に住まなければならなくなるので）、この反論は新教徒が供儀パンの同様の聖別式の効果に対して行っているものである。

*20 タキトゥス『年代記』I、73, 74, スウェトニウス、ティベリウス、58 それに至る所で。

*21 ベラルミン『凱旋教会についての論議』第二巻、21「聖遺物と聖像について」

*22 この疑問一つでライブゲバーは自分の観念主義とすべての観念主義を壊している。というのは他者の倫理性と非倫理性の確信は単に感覚的な確信であるからで — ただ感覚的な媒体を経ており — それでいて感覚的確信は倫理的確信と同等である。倫理の定言命令は感覚的確信に基づいているからである。何人かのフィヒテ主義者のように、自分は諸行動から自由の本性の間近さに気付くと述べることは意味がない。というのは自分の気付く＜もの＞ではなく、自分の気付く＜ということ＞が（夢や熱病のときにはこの気付く＜もの＞も現れるが、気付く＜ということ＞なしに現れる）疑問であり、眼目であるか

らである。この感覚的自明性は、私が倫理的本性を見ようと無生命のものを見ようと同じで、言語機械を聞こうと人間の声を聞こうと同じである。要するに実践的理性は他者の諸自我の存在も、自らの肉体と他者の肉体、つまり感覚世界の存在も格別変わらぬ同程度の確信を抱いて前提としている。私は自らの肉体と他者の所有物と実際全く倫理的關係にあるからである。自分の肉体と他者の肉体が我々にとって単に主観的な存在にすぎないから、実践的理性が行動できるのであれば、この理性は諸自我の場合もやはり同じように行動できる。編集者の注。

*23 パリで神々しい祭餅を病人の許に運ぶ貧しい司祭はこう呼ばれる。編集者の注。

*24 彼の言う通りである。動物も無機物のように単なる手段として、ただ理性的な目的のための単なる利便性のみを大事にされるようなものとして扱われてはならない。私が生きた馬を冗談で刺して、傷付けたら、私は対象そのものに不正なことをしたと感ずる。ウォーウェルマンの[絵の]馬を毀したら、対象よりはせいぜい別の生き物に不正なことをしたと感ずる。動物を手段に貶める批判的主張の結論はこうなるだろう。私がアジアでよく見られる本物の象を輪切りにした場合よりも、ヨーロッパの剥製の象を輪切りにした場合がより不当である、と。私が論争した二人の硬化した批評家、石化人間は大胆にもそういう結論にするだろうと言った。

*25 これは次のパラグラフ[節]に続く。

*26 エジプト人はこう信じた、この世の創造主のクネフは自分の口から一個の卵を生んだ、この卵の中にこの世があった、と。エウゼビウス『福音のための準備』Ⅲ、Ⅱ。

*27 ローマのパンテオンではこの両名のみが見られた。

*28 ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第一巻、第Ⅵ編、主題の行。

*29 プルタルコス『食卓歓談集』4.5。

*30 恐ろしげな苔むした老人で、地球の中心の丸い球の上に座っていて、一切をなし、自ら神々も創った老人、しかし人々が名を呼んではならなかった老人。ラームラー。
[Ramler、彼の『文芸入門』(四巻本、1758年以降)の第一巻参照]

*31 この不得要領はすべての学派に当たり、すべての学派を罰している、二元論を仮定する学派もそうである。というのはこの学派はその不得要領を自我から非自我へ移しており、その不得要領は更に大きなものになっているからである。あるいはそれを誤魔化して二つの間で交代させている、つまり二つの椅子の間に座っているからである。

*32 というのは過去[過ぎ去った時]は現在によって措定されるからである(『知識学の独自性の基礎』一〇六頁) — 同様に絶対的の自我の場合もそれ以前の時は問題にされない。

— しかしすでに諸自我のフィヒテの多数によって過去は仮定される、かくて過去は空間(この非自我の立法数)そのものよりも客観的なものとなる。

*33 というのはデカルト主義者によれば(本来はどの人によっても)本性[生物]は引き続き創られなければならない。オリゲネスによれば神的な息子はいつも父によって創られる。 — これは同じことである。

*34 例えばパレルモでは四大陸を特徴付けていることになっている動物達が水盤を満たしているのに、水盤から飲んでるように見える。

*35 少なくとももどの精力的な人間も、その気になれば哲学する。哲学者は詩人になれない。しかし詩人は容易に哲学者へと身を落とせる、プラトンから私がちょうど製本屋から

受け取った詩人に至るまで。これはバウターヴェーク⁽³¹⁾の立派な『論証』のことで、これは現今の論理的泡の下での堅固な岩である。私はまず冒頭、自明な論理を読んだ後、そう判断した。一 哲学することの容易さは、哲学が千もの関連する段[幕]からなる一つのオペラであって、この段には容易に一つの新しい動機付けられた段を添えられることから来ている。これに対して詩人にとってすべての他人の作品は何の役にも立たない。詩人は新たなオペラの全体を作らなければならない。編集者の注。

*36 彼の『永遠への展望』Ⅱ、書簡、12。

*37 デルハムの『天文神学』参照。

*38 「自我は、その活動が客観的なもの等である限り、有限である（その活動が自分自身に対する限り、無限である）。しかしこの有限性あるいは境界は、境界は常に更に広く広げられ得るので、無限である」（『全知識学の基礎』二四二頁）[字句通りの引用ではない]。

*39 素朴なウィーンの図書館司書（何という挑発的な三和音か）デュヴァル⁽³⁵⁾はそのようにすべての機知豊かな愛しい文通相手の女性を呼んでいた。

訳注

タイトル

(1)『フィヒテ哲学あるいはライブゲーバー主義の鍵』というタイトルはJ. A. ErnestiのClavis Ciceroniana(1739年)を手本に作られている。Ernestiの書は「鍵」の第十五節でも言及されている。なおこの小書は自我の絶対性を説くフィヒテへの反論として1799年12月二週間足らずで書き上げられ、ヤコービに閲覧して貰ったもので、『巨人』の付録の一部として出版する予定であったが、1800年3月ベルリンのHenningsから別個に出版された。

序言

(1)Naide、nais proboscidea、蝸牛の一種で時に末尾の関節を切り離すが、その部分はまた生き続けるそうである。

(2)アルビヌスの作用元素、解剖学者Bernhard Siegfried Albinus(1697-1770)の著作からの概念。ジャン・パウルはまず生命の基となる元素を考えている。

(3)Friedr. Georg Jacobi(1743-1809)、詩人、哲学者。ジャン・パウルは晩年まで親交があった。ジャン・パウルは彼の『スピノザの教義について』(1785)や『信仰についてのデイヴィッド・ヒューム』(1786)、それに『フィヒテ宛の手紙』(1800)等を参考している。

(4)J. B. Schadの『フィヒテ体系の分かりやすい論述』、これは『フィヒテ哲学の鍵』と同じ出版社から出版されている。

(5)ヤコービの『スピノザの教義について』、第6付録、365頁以下参照。

(6)qualitas occulta、昔の哲学で、大きさは分かるが内実の分からない物事に対して用いられた。

(7)エリュシクトーン、オウィディウス『変身物語』Ⅷ、877以降参照。

(8)Pierre Louis de Maupertuis(1698-1759)、フランスの物理学者、哲学者。Lettres

Philosophiques(1768)でこの提案をしている。

(9)クセーニエン、ゲーテ、シラーによる諷刺の二行詩集はまず1797年『ミューズ年鑑』に発表された。

(10)麦藁冠、結婚式後の日に冗談で花嫁に麦藁冠を渡す風習があった。

(11)日本のイエズス会士の順応、キリスト教の伝道の際に、キリスト教の教義を極東の宗教の伝統的部分に合わせていいか議論があった。

(12)『人間の使命』、フィヒテの書は1800年の初めに出版された。

(13)ポリュフェモス、ホメロスの一つ目の巨人は一般に額に目を有すると思われている。

編集者に対する保護状

(1)『花の絵』、ジャン・パウルの長編小説『ジーベンケース』の本来の題の一部。

(2)『アテネウム』、1798年第1巻、第2分冊、307頁にこう書かれている。「珍しい現象である。芸術の初歩を解せず、一つの機知も純粹に発せられず、通常立派な語りという意味での話を物語ることのできない著者がいるが、それでもこの著者に対して、この著者は反抗的で、核のある、張り詰めた、立派なラブゲーバーの『アダムの手紙』のような諧謔的洒神賛歌を有する以上、偉大な詩人という名を取り上げるとしたら、不当なことになるであろう」。

(3)ベーレントによると、ジャン・パウルの新聞からのメモに以下のようなものがあるそうである。「ハンブルクのドレック墨壁四十六番地のヨーゼフ・ザムゾン・ヘルツは金の縁の有ったり無かったりするビール・グラス、ポンス・グラスを所有している」。

(4)S殿、ラブゲーバーは以前ジーベンケースでもあり、また後にショッペでもある。ベーレントはショッペの方であろうが、明らかに同一人物とはしたくなかったのでであろうと注釈している。

(5)August Ludwig Hülsen(1765-1810)、『懸賞問題の吟味、ライプニッツ、ヴォルフ以来形而上学はどのような進歩をしたか』(1796)のことと思われる。

(6)Joh. Amos. Comenius(1592-1670)、ボヘミアの神学者、教育学者。

(7)Wolfgang v. Kempelen(1734-1804)、彼はトルコ人の服を着たチェスの自動人形の発明で名声を得た。

(8)犬の洞穴、ナポリ近郊の「犬の洞穴」を暗示したもの。この洞穴は古代より真空のせいで知られていた。最初は奴隷が投げ込まれ、後には犬が投げ込まれ、すぐに窒息死した。

(9)フィヒテ、『聴衆への訴え』(1799)、四四頁参照。

(10)諦観主義、原文はFohismus、ハンザー版の注では古代中国の、仏教の影響を受けた静寂主義と注されている。他に仏教のことという注釈もあるが、若きジャン・パウルは抜き書きではFohiを古代中国の皇帝と解しており、詳しくは不明。

(11)辞書、1788年Karl Chr. Erhard Schmidは『カントの著作のための便利な辞書』を出汁、類似の書が続いた。

(12)Gebhard Fr. Aug. Wendeborn(1742-1811)、説教師、文化史家。長いことイギリスで説教師として働き、1784-88年ベルリンで『十八世紀末の大ブリテンにおける国家と宗教、学界、芸術の状態』と題する作品を発表した。

- (13)間違った風に銅版画に、ジャン・パウルは『ヘスペルス』の第二版のために準備された Pfenniger による自らの肖像画のことを言っている。
- (14)古いイェナの七つの奇蹟、ラテン語でこう知られているとのことである。Ara, caput, draco, mons, pons, Vulpecula turris / Weigeliana domus: septem miracula Jenae.
- (15)観相学的断片、ラーヴェーターの観相学に関する本のタイトル (四巻、1775-78)。
- (16)Albrecht von Haller(1708-1777)、ハラーに関する文の意味は、生理学の臨床的応用というハラーの方法は生理学をまた解剖学に近づけるといふことか。
- (17)五つの点、五つの点で顔を再現すること。
- (18)味覚はより繊細な匂い、逆にカントは匂いを離れた味覚と定義している。
- (19)広大なカルタゴ、デイドは伝説によれば、カルタゴの王から牛の皮で覆える程の土地を貰えることになった、そこで彼女は皮を細い帯状に切って、広大な部分を囲んだそうである。
- (20)Erasmus Darwin(1731-1802)、Charles Darwin の祖父、医師、自然科学者。『ゾーノミアあるいは有機的生命の法則』(1795-99)
- (21)ヘルダー、『メタ批判』第二部の冒頭参照。
- (22)リングワ・フランカ、レヴェント地方の言語、崩れたイタリア語から発展した言語。
- (23)ens reale、スコラ哲学では神は自身の創造者として万物の最も現実的なもの ens realissimum と呼ばれる。
- (24)物活論、Hylozoismus、物質は内在する原理 (世界の魂) によって生命を得たと仮定する哲学的教義。
- (25)三つの世紀の傾向、フリードリヒ・シュレーゲルの『アテネウム断片』Nr.216 に「フランス革命、フィヒテの知識学、それにゲーテのマイスターは世紀の最大の傾向である」とある。(『アテネウム』、1798、二三二頁)。
- (26)『講話』、フリードリヒ・シュライエルマッハーのこの講話は 1799 年に著者名なしに出版された。
- (27)二進法、ライプニッツが最初に考案した。
- (28)カントの使徒、「ルカ」第十章第一節参照、七十二人ではなく、七十人と聖書には記されている。
- (29)ブラウン主義、John Brown(1735-88)、イギリスの医師。彼は人間の健康は大気、睡眠等の刺激に懸かっていると説き、この刺激を高めようとした。
- (30)ガルヴァーニ主義、Aloisio Galvani(1737-98)、イタリアの医師、物理学者。蛙を解剖して所謂ガルヴァーニ電気を発見した。
- (31)水成論者、Abraham Gottlob Werner(1715-87)の説の信奉者。彼は大地は水から生じたと説いた。

鍵

- (1)ヌーメノン、フェノメノンの対立概念、経験の外部にあり未知のもの。
- (2)自己由来性、自らによる完全な実存、スコラ哲学では神の自律性とかフィヒテの純粹自我といったもの。
- (3)合流主義、肉体と魂が働くとき相互の物理的影響を説く教義。

- (4) ヤコービ、 『フィヒテ宛の手紙』 四頁。
- (5) フィヒテ、 『聴衆への訴え』 一一〇頁以下参照。
- (6) Jean Baptiste Robinet (1735-68)、フランスの啓蒙家。『自然について』(五巻本、1761-68)の中で自然の神的起源を仮定しているが、神の本性に有限な人間的述語を記することには踏み込まなかった。
- (7) 第五版の続き、 ボシユエの『カール大帝までの一般世界史序論、 ヨーハン・アンドレアス・クラマーによって引き継がれ、注を付されたもの』(1752-80)。
- (8) Johannes Hevelius、 本来はHewelcke(1611-87)、重要なドイツの天文学者。
- (9) ビシヌユの変身、 ヒンズー教によれば、神々の神のビシヌユは地上で十の変身をした後、最後に世界の終わりに裁判官として現れる。
- (10) かの乞食、 Antoine Galland (1646-1715)がフランス語に訳した『千夜一夜物語』でこの種のモチーフはヨーロッパで馴染みのものとなった。
- (11) 七十人の翻訳家達、 ギリシア語への旧約聖書の最初の翻訳は七十人(正確には七十二人)の翻訳家達によってなされた。
- (12) Robert Bellarmine(1542-1621)、神学者、枢機卿、反宗教改革の立役者の一人。
- (13) Alexander Suworow, Italijski 侯爵(1730-1800)、ポーランドそれに革命期のフランスとの戦争におけるロシアの司令官。
- (14) モンテーニュ、 『エッセー』 岩波文庫 原二郎訳第一卷二十一章「想像力について」参照。
- (15) Samuel Heinecke(1727-90)、聾啞学校の設立者。従来のスペル教育に対して小学校での音声教育を導入した。
- (16) ペシュレ人、 南米フェゴ島の小さなインディアンの部族。
- (17) Samuel Bochart(1599-1667)、1663年ロンドンで聖書の動物について『Hierozoicon、聖動物辞典』を記した。
- (18) Peter Pinder(つまり John Wolcot)は1768年虱についての小叙事詩を書いた。ホメロスについては類似の詩は知られていない。
- (19) Salomon Geßner(1730-88)、スイスの詩人、銅版画家、出版者。その散文の牧歌は十八世紀に人気があった。
- (20) 大虐殺者、 1792年フランスでの9月の虐殺者達。
- (21) 糞信仰者、 この派は聖餐のとき本当にキリストの体と血が含まれているのであれば、それは他の食物同様に消化され糞となると主張し、それ故単にキリストの精神的実在を仮定した。
- (22) カント主義者の J. B. Erhard は 1795年フィヒテとニートハンマー編集の『哲学ジャーナル』に「悪魔の弁明」という論文を書いた。
- (23) オーギュスト、 コルネイユの『シンナ』V、3では逆にオーギュストが「友達でいよう、シンナ」と言う。
- (24) 天父受苦論者、 神に受難能力を認めて、そのためにさながら父なる神を十字架に架けてしまった唯一神教派(六世紀)に対する嘲りの呼び名。
- (25) 嘆き、 ジャン・パウルは *maestoso* を用いているが、*mesto* との混同と思われる。
- (26) 医師で化学者の Stahl は医学的にアニミズムを説き、魂が体のすべての部分を結び付

けているとした。

(27)『学的ドイツ』、Joh. Georg Meusel(1743-1820)は十八世紀後半頃のドイツ人作家に関する人名辞典を編集した。

(28)ヘルダー、『イデー』Ⅲ、5 参照。

(29)Leonhard Euler(1707-1783)、スイスの数学者。『無限解析入門』(1748)。

(30)Johann August Ernesti(1707-1781)、文献学者。タイトルについての注参照。

(31)Friedrich Bouterwerk(1766-1828)、ドイツの詩人、美学者。1799年二巻本の『一般論証のための理念』を上梓した。

(32)Joh. Kaspar Lavater(1741-1801)、作家、観相学者。

(33)反映、『聴衆への訴え』四四頁と四八頁参照。彼は感覚世界を我々の内部の超感覚世界の反映と呼んでいる。

(34)Joh. Chr. Edelmann(1698-1767)、革命的神学者、スピノザ哲学の信奉者。

(35)Jamerai Duval(1697-1775)、ウィーンのフランス人亡命作家。ベーレントは「挑発的な三和音」に関して「ウィーン人はジャン・パウルの見解によると一般に素朴ではなく、本を好まない」と述べている。

(36)ヤコービ、『フィヒテ宛の手紙』二二頁以降参照。

(37)『告知者』、『Verkündiger、あるいは芸術や学問等における進歩と最新の観察のための新聞』、1812年までニュルンベルクで発行された。

(38)Joh. Georg Ritter v. Zimmermann(1728-95)、著名な医師。ハノーヴァーのイギリス国王の侍医を務めた。言及されている機械は憂鬱病者用のもの。

(39)ベラルミン、鍵の章の注(12)参照。

(40)供えのパン、「サムエル記上」第二十一章、第七節参照。

あとがき

ジャン・パウルのリポジトリでの翻訳登録にあたってはこれまで「解題」を付してきたが、今回の『フィヒテ哲学の鍵』については日本でもすでに立派な論考が発表されており、文献をざっと読んだ印象程度のもを記すことにしたい。日本の論考は以下のものがある。Kamei Hajime:Leibgebers philosophische Dichtung. 名古屋大學文學部研究論集。 42, 165-181, 1996-03-31。

茂幾保代：ジャン・パウルにおける自我の問題を巡って ― 『フィヒテ学徒の鍵』と『巨人』における登場人物ライブゲーバーを中心にして。「独文学報」（大阪大学ドイツ文学会）145-161.(24) 2008。

ドイツではコメレルに始まり、Wolfgang Harich:Jean Pauls Kritik des philosophischen Egoismus, 1967、に触れるべきであろうが、蒼古たる感が否めないで、次の三編を紹介しておきたい。

Timothy J. Chamberlain:Alphabet und Erzählung in der "Clavis Fichtiana" und im "Leben Fibels". Jahrbuch der Jean Paul Gesellschaft. S.75-92. 1989.

前半の要旨を記せば、『フィヒテ哲学の鍵』の中で、ライブゲーバーが出版する予定であったのは、アルファベット順の節の『鍵』という虚構であるが、「ジャン・パウル」はそれを変更してライブゲーバーの発狂で終わらせている。ライブゲーバー的、循環的思考の結末を明示するためである。

Sandra Hesse: "Mir (empirisch genommen) grauset vor mir (absolut genommen)." - Zur philosophischen Kritik und poetologischen Reflexion in Jean Pauls Clavis Fichtiana. Jahrbuch der Jean Paul Gesellschaft. S.107-149. 2005.

要旨を記せば、ジャン・パウルはフィヒテをよく理解していたと思われる。『鍵』のアルファベット順の節を「ジャン・パウル」が変更したのは、文学的効果を狙ったもので、成功している。時代の風潮の警告にもなっている。

John W. Nelson: Die Willkür der Ichsucht:Jean Paul's Clavis Fichtiana and the critique of german idealism. 1-240. 1999.

要点は、ジャン・パウルはフィヒテをよく理解しているとはいえないが、当時の風潮に対する貴重な異議申し立てである。ジャン・パウルの関心は「非自我」にではなく、「根源の自我」にあった。

なお Nelson は『フィヒテ哲学の鍵』の英訳を付録としており、参考になった。

他にまたこの小論ではジャン・パウルの言語観がよく引用され論じられている。訳者としては第十三節の自己に対して他人のように振る舞う「スヴォーロフの父親」の逸話のあたりが、自我に他者を内在させていて、大変興味深いのであるが、果たして訳文が正確なのか今一つ自信がないので、感想にとどめておきたい。

この翻訳は『巨人』の「喜劇的付録」としてまとめて訳す予定であったが、ジャン・パウル同様別個に公表することにした。

また、訳文のラテン語に関しては、科学史家の高橋憲一先生のご教示を頂いた。感謝申し上げます。

2010年8月

恒吉法海